



# JACET通信

一般社団法人 大学英語教育学会

December 2018

The Japan Association of College English Teachers

No.203

## 目次

巻頭言（寺内一）	1	第1回（2018年度）ジョイントセミナー （浅川和也、小田眞幸、田地野彰）	24
第57回（2018年度）国際大会 「国際大会を終えて」（高橋潔）	3	2018年度JACET賞	25
大会報告（上田倫史）	4	2018年度JACET名誉会長賞	25
担当支部と会場校から（村野井仁）	4	本部だより（下山幸成）	26
講演・シンポジウム	5	支部だより	36
第58回（2019年度）国際大会	23		

## [巻頭言]

# JACET 第60回記念国際大会（2021）に向けて —新しくて伝統のある「JAAL in JACET 学術交流集会」の開催—

一般社団法人大学英語教育学会会長 寺内 一  
（高千穂大学）

平素は本学会の諸活動に対し、格別のご支援を賜りまことにありがとうございます。本稿では、学会の定款等の変更についてのご報告をしたあと、「第1回JAAL in JACET学術交流集会」を中心に2018年度からの新しい事業についてご説明をいたします。

## 1 『定款』、『会員規程』等の変更

2018年度社員総会で、本学会の『定款』と『会員規程』に一部の変更が承認され、さらにその下位規程である『学会運営規程』の一部を変更いたしました。その変更は2019年度（2019年4月1日以降）に有効となります。詳細は、JACETのWebに掲載しますのでご確認いただきたくよろし

くお願いします。

## 2 2018年度からの新規事業

ここ数回の『JACET通信』でご紹介してまいりましたように、JACETの諸先輩が長く継承されてJACETのひとつの伝統ともなっている国際大会とサマーセミナーに関して、その内容はもちろん、開催時期、開催場所などをこの時代に合うべく一部変更をさせていただきます。特に今年度の国際大会から海外の提携学会の会員の方も積極的にJACETの国際大会に参加し、発表できるように準備を開始しました。まずは、海外提携学会からの一般発表者に対して、グラント制度を導入いたしました。2021年度の第60回記念国際大会を目標に整備し

ていくことになります。

本稿では、それに加えて2018年度から新たに始めた事業「第1回JAAL in JACET学術交流集会」をご紹介します。

本通信が皆様のお手元に届いた時には「第1回JAAL in JACET学術交流集会」は終了していると思います(2018年12月1日、高千穂大学にて開催)が、この学術交流集会の目的と内容をご紹介します。

まず、JAAL in JACET に関して、山内ひさ子元副会長(学術交流委員会委員 AILA 担当)が『JACET 通信』第197号で報告されておりますので、その一部をもう一度ご紹介します。

AILA (Association Internationale de Linguistique Appliquée の頭文字、英語名は International Association of Applied Linguistics) は1964年にフランスで設立された応用言語学会連合会が発展したものです。AILA の会員は原則団体会員で、1か国から1学術団体がAffiliate Association として加入が認められています。現在34か国、34の団体がAffiliate Association となっており、会員数は約8,000名です。JACETは小池生夫元会長のご尽力により、JAAL in JACET(会員数200名で登録、JACET会員のうち特定の会員をJAAL in JACETのメンバーとはしておらず、人数のみを登録している)として、1984年8月から日本のAffiliate Associationになっています。

AILAの4つの目標は以下の通りです。(1) 応用言語学分野への貢献、(2) 学術的知識と実践情報交換の促進、(3) 国際交流の活性化、(4) 途上国における応用言語学研究的の支援。

そして、その目標を達成すべくAILAは5つの活動を掲げています。(1) 国際大会の開催、(2) 研究ネットワーク設立の支援、(3) 学術雑誌とニューズレターの発行、(4) 目的・目標が近い他の学術団体との協力、(5) 国際大会時に途上国からの参加者へ奨学金の支給。

こうして、JACETの中にJAAL in JACETという組織を作ること、応用言語学研究的を組織的に開始し、その集大成として、早稲田大学において1999年のAILA国際大会を主催しました。JACET会員と海外からのAILA 会員2,300人が集い、大

変な盛会となりましたのは皆様の記憶に残っている通りです。

そして、皆様が所属されておられる研究会は、1999年に早稲田大学で開催されたAILA'99 Tokyo で日本からの応用言語学研究的の発表を多く出すために、その数年前から研究会による研究活動の奨励に本腰を入れたことが契機となり、全国に数多く発足したものです。それ以来、20年近く各研究会が盛んに研究活動を行っています。すなわち、JAAL in JACETは皆様が所属しておられる研究会の活動として脈々と受け継がれているのです。JACET会員であれば全国どの研究会にも、そして、数の制限もなく参加し、研究活動を行うことができるのは言うまでもありません。

そのような応用言語学研究的を、JACETとして再認識し、その研究の場をさらに発展させるべく「第1回JAAL in JACET学術交流集会」の開催に至りました。

英語教育、応用言語学研究的とその実践に携わる者の研究力を高め、会員や研究会、学会の壁を超えた研究促進を目的とした「第1回JAAL in JACET学術交流集会」を開催し、本学術交流集会で発表された研究の論文集『JAAL in JACET Proceedings, Vol. 1』(査読付き)を発行し、研究成果を国内外に発信します。

その内容は、個人研究発表、賛助会員プレゼンテーション、JACET SIG 研究報告(ポスター・成果物展示)、産学連携研究発表、JACET教員と賛助会員の連携に向けた情報交換会、関連学会合同企画等が含まれております。

この「第1回JAAL in JACET学術交流集会」で特筆すべきは2つあり、まずは産学連携研究の推進です。「10年後の英語教育を考える」という共通テーマのもと、教材、評価(試験)、IT、グローバル(国際交流)の大きなカテゴリー別にJACET会員と賛助会員とで共同研究を行うきっかけの場とします。この産学連携研究に関しては、賛助会員同士の情報交換とその共有、さらにはその情報をJACET会員(主に教員)が共有し、JACET全体で英語教育、応用言語学における様々な課題を10年後に向けて考えていこうというものです。もう一つは、応用言語学研究的という大きな範疇で研究会同士の共同研究、さらには国内外の提携学会の研究会との共同研究までも視野に入れた研究課題の創出があります。

いずれにしても、この「JAAL in JACET学術交流集会」を何回か重ねて、2021年に予定されている第60回記念国際大会でその研究成果を出すことを目標に、JACETという研究集団が邁進していくことになればことのほか嬉しいです。この学術交流集会をきっかけとして、JACETの研究会活動は非常に広がりがあり、さらに奥行き深いも

のであること、さらに、それを国内外により発展させていくことの価値を再認識していただければ幸いです。

JACETの発展と日本の英語教育、国内外の応用言語学研究に貢献できるよう今後とも最善を尽くして参りますので、会員の皆様のご理解とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

## [第57回国際大会]

# JACET 第57回（2018年度）国際大会を終えて

東北支部長・大会委員長 高橋 潔  
(宮城教育大学)

第57回JACET国際大会は、8月28日から30日まで3日間にわたって、東北学院大学土樋キャンパスで、文部科学省・宮城県教育委員会・仙台市教育委員会・仙台国際観光協会・東北学院大学の後援により、3名の基調講演者をお迎えし、「グローバル化に向けた小中高大一貫した新しい英語教育の質保証（Assuring Quality Learning Outcomes in Primary to Tertiary English Education for Globalization）」を大会テーマとして開催された。

基調講演では、野口ジュディー津多江神戸学院大学名教授が“Preparing Our Students for a Rapidly Evolving World”の題名で、Dr. Judith Hanks (Associate Professor of University of Leeds, UK) が“Involved Everyone in Enhancing Quality of Life in Language Education: Explorations and Insights from Praxis”の題名で、板垣信哉宮城教育大学名誉教授が「小中高大の英語教育の接続—英語力の「質保証」の観点から—」の題名でお話いただいた。これらの基調講演以外では、全体シンポジウムは「4技能入試の現状と未来」と「次期学習指導要領を踏まえた英語教育の新たな学習成果」というテーマで開催され、デジタル化とともに急速に変化していく世界の中で、東北支部企画でもとりあげた小学校での英語教科化や大学入試の4技能化を見据えていかねばならない日本の英語教師にとって、有益で貴重な情報を与えてくれるものであった。

3日間の間、天候は曇天で時に小雨交じりであっ



たが、参加者は、国内の日本人会員や国内の外国籍の方々以外に、直接今大会に参加された海外からの参加者もシンガポール、韓国、インドネシア、英国、中国、台湾、タイ、マレーシアという国々・地域まで及び、東北支部での開催としては過去最高の740名以上に達した。発表件数は総計200件以上で、各種講演13件、各種シンポジウム19件、各種ワークショップ9件、各種研究発表・報告129件、各種ポスターセッション49件という数に上った。

会員がわずか70名ほどしかいない東北支部でこれだけの規模の大会を無事開催できたのは、寺内一会長をはじめJACET本部の国際大会組織委員会の志水俊広・内藤永・上田倫史の3名の担当理事と多くの本部委員の方々のおかげであり、東北支部では、村野井仁東北学院大学文学部長と同大学の先生方のおかげである。ここに厚く御礼申し上げます。

## 大会報告

国際大会組織委員会本部委員長  
上田 倫史  
(駒澤大学)

第57回国際大会は、2018年8月28日(火)、29日(水)、30日(木)の3日間、宮城県仙台市にある東北学院大学土樋キャンパスにて開催されました。

今回の国際大会においては、ジュディー野口先生、Judith Hanks先生、板垣信哉先生をお迎えし、3つの基調講演を行いました。また、東北支部の企画による世界的に著名な音声学者のJohn Wells先生による特別講演、並びに特別シンポジウムも開催され、大変多くの方々にご参加いただきました。さらに、JACETの海外提携学会の代表による13の招待講演による基調講演、2件の特別シンポジウム、1件の特別委員会報告、2件の特別企画ワークショップ、7件の賛助会員特別シンポジウム、12件の賛助会員発表、3件のDoctoral Thesisポスター発表、4件のグローバルポスター発表、22件のSIG研究会ポスター発表、12件の外部試験ポスター発表が行われました。

また、今回の国際大会にはたくさんの会員の方々から発表の申し込みをいただき、78件の研究発表、39件の事例研究、7件のワークショップのご発表をいただきました。発表件数の総数は219件となり、参加者は742名でした。今回の国際大会は、東北支部で行われた国際大会の中でも最多の参加者数を記録し、盛況のうちに大会を無事に終了することができました。

大会終了後に参加者から大会アンケートなどを通じまして、大会運営あるいは企画に関しまして様々なご感想、ご助言、ご意見を頂きました。ありがとうございました。お寄せいただきましたご助言、ご意見を参考にし、次年度以降の国際大会の運営の仕方を改善していくとともに、より興味をひくような企画を練っていく予定です。

最後に、今回の国際大会を実際に運営していただきました、東北支部大会実行委員長の高橋潔先生、ならびに東北支部の実行委員の先生方には、大会運営にご協力いただきありがとうございました。とくに、会場校の実行委員であった村野井仁

先生、中西弘先生には大変お世話になりました。さらに大会の企画運営に携わった、国際大会組織委員会本部委員会委員の各位に心より感謝申し上げます。

## 担当支部と会場校から

国際大会支部実行委員  
村野井 仁  
(東北学院大学)

第57回JACET国際大会のため東北学院大学をお使いいただきありがとうございました。会場校として準備が不足していた点、多々あったかと思いますが、予測よりも多くの会員の皆様にお出でいただき、大会が無事終了したことをうれしく思います。奇しくも今年は東北学院が1918年に英語教師養成のための師範科を設置してからちょうど100年目にあたります。そのような特別な年に世界の様々な地域から英語教育の研究者をお迎えし、英語教育に関する研究と学びを共有できたことは、勤務校の教職員にとって大きな喜びでありました。

東北学院大学では1983年、1993年、2003年と過去に3回JACETの大会会場校を務めさせていただいております。東北支部で大会を行う際にも宮城ならではの文化的多様性の点から見てもったいないのではないかと思います。当初は他県での開催も提案してみましたが、最終的には実施面で使い易い東北学院大でお引き受けすることとなりました。学内に実行委員を主体的に引き受けようとする意思を持った専任教員が複数いたことが会場校引き受けを決める最大の要因でした。引き受けにあたって懸念されたのは、現在キャンパスの移転統合計画が進行している最中であるため、設備的に十分に対応できるかという点でありました。予想通り、会場を近くにまとめることができず、参加者の皆様には天候の悪い中何度も車道を濡れながら横断していただくことになってしまい、大変心苦しく思っています。

会場校での業務にあたり、心底心強かったのは寺内一会長、内藤永理事を始めとする本部運営委員会及びJACET事務局の皆様のお力でした。準備段階から何度も大学へ足をお運びいただき、大会期間中はあらゆる問題に迅速かつ柔軟にご対応い

ただきました。学会を支えるスーパー玄人集団の仕事ぶりに終始頭が下がるばかりでした。東北支部の皆様も高橋潔支部長の下、チームワークよくお働き下さり、円滑に業務を遂行することができたと思います。反省点は多くありますが、この大会で多くの出会いがあったことは間違いなく、大いなる成果が得られたことを感じます。大会に関わったすべての皆様に深く感謝いたします。

## 講演・シンポジウム

\*要旨については、原則として、大会要綱に記載されたアブストラクトを転載しております。

### 【基調講演1】

#### Preparing Our Students for a Rapidly Evolving World

Prof. Emerita Dr. Judy Tsutae Noguchi  
(Kobe Gakuin U.)

The ability to communicate via a lingua franca has never been as important as it is today, for everything from global tourism to multinational business to collaborative academic research and development.



The World Economic Forum (2015) has estimated the number of English users to be about 1.5 billion, while the number of those using it as a native language to be less than 400 million. This means that interactions using English are very likely to occur among ELF (English as a lingua franca) users. As language educators, how can we prepare our students for such real-life situations? We may not need to aim for native-like production, but it does have to be understandable to those from other language and culture backgrounds. This raises the issues of what kind of English we should teach and how to check whether or not we have been successful. Another factor that cannot be ignored in the language

classroom today is our rapidly evolving global society, which is undergoing what has been called the Fourth Industrial Revolution (World Economic Forum, 2016). This brings to the fore two other issues: what will our students need for jobs in the 21st century and how do we work with Generation Z students who are digital natives. This lecture will try to find answers to the three questions of how to prepare students to master the English that they will need for life in the 21st century, how to motivate this generation of students, and how to assess our teaching efforts.

### 【基調講演2】

#### Involving Everyone in Enhancing Quality of Life in Language Education: Explorations and insights from praxis

Assoc. Prof. Dr. Judith Hanks  
(U. of Leeds, England)

For many decades the issues raised by the notion of communicative competence in language education have been discussed. Until recently, though, the agency potential of learners,



teachers, curriculum developers, teacher educators and policy-makers working together has been overlooked. In this paper I argue that the Exploratory Practice principle of explicitly aiming to involve everyone in practitioner research affords opportunities for quality of life and learning in language classrooms.

The field has moved from a focus on communicative competence to symbolic competence and intercultural communication. In a similar trajectory, we have moved from ideas about teachers researching their classrooms as part of curriculum development, to linking research and pedagogy and the powerful movement for practitioner research. More recently, the related notions of learners as key developing

practitioners, and team teaching/team learning, have been brought to the fore. As yet, however, these trajectories have not been brought together. Here, then, I analyze communicative and symbolic competence through the lenses of practitioner research and intercultural communication.

I discuss a number of case studies situated in English for Academic Purposes programmes and Teacher Development initiatives at universities in Brazil, Japan, Turkey and the UK. Inviting learners, alongside teachers, curriculum developers, teacher educators and policy-makers, to puzzle about their experiences brings to the surface important questions about identity, motivation, and well-being. I conclude that the communicative, symbolic, and intercultural issues encountered whilst working for deeper understandings across cultural borders are central to quality of life, and hence learning opportunities, for all those involved in language education.

### 【基調講演3】

#### Assuring Quality Learning Outcome in Primary to Tertiary English Education in Japan (in Japanese)

##### 小中高大の英語教育の接続 —英語力の「質保証」の観点から—

Prof. Emeritus Dr. Nobuya Itagaki  
(Miyagi U. of Education)

英語教育が大きく変わろうとしている。小学校4年間の外国語（英語）活動と外国語（英語）教育が新たに加わり、中・高等学校の6年間で、10年間の教育課程が確定している。それを受けての大学英語教育はさらなる可能性と同時に、想像を超える混乱が予想される。さらに、問題は小中高大の10年間及び大学1年間あるいは2年の教育課程の成果と可能



性を見通せないことである。学習指導要領では、それぞれの目標が明確に記されているが、日本での12年（あるいは11年間）の英語教育の成果を予測することは困難であり、結果として、それぞれの指導にあたる英語教育関係者の課題は予想を超えるものと考えられる。その意味で、英語教育に係る大学教員は教育と研究において、これまで以上の重い責任を担うことになると言える。

本講演では、小中高大の教育課程の基礎理論として、外国語能力の熟達化をどのように捉えるべきかの論点とそれに基づく教育課程の私案の提案を予定している。目指す英語力は文部科学省の新学習指導要領（2017年3月告示）との関連で、CEFR及びCAN-DOリスト等で示されているが、多くは実践的指針であり、各校種で目指す外国語運用能力、外国語の教授・学習、指導方法、児童生徒の発達段階、等々の論点との関連性が理論的に必ずしも明確でないと言える。具体的には、①言語能力の熟達化理論（例：言語知識とその処理過程の熟達化）、②自然な熟達化（例：母語、外国語）、③言語スキルの独立性（例：「話し言葉」と「書き言葉」の独立性）、④文法指導と練習の在り方（例：暗示的指導と明示的指導）、④定型表現依存型運用能力と文法規則依存型運用能力の関係、⑤小中高大の接続問題（例：外国語教育課程の私案）などの論点を主な内容とする。

内容が、大学及び各教育現場での英語教育の実践と研究に資することがあれば、幸いであります。

### 【特別シンポジウム1】

#### Current and Future Assessment of Four Skills in an Entrance Examination

##### 4技能入試の現状と未来

提案者：小幡泰弘（文部科学省初等中等教育局・国際教育課長）  
藤村正之（上智大学高大連携担当副学長）  
安河内哲也（一般財団法人実用英語推進機構 代表理事）  
提案者・司会：尾関直子（明治大学教授）

2020年から大学入学共通テストが始まり、4技能を測る外部検定試験が認定試験として活用される予定である。この高大接続改革は、にわか

始まったわけではなく、初等・中等教育の改革の結果として予想されたものである。2020年には、小学校で英語が初めて学科として教えられることとなり、中学・高校の次期学習指導要領では、「言語を使って何ができるか」に重点を置いた指導と評価がさらに重要視されることとなる。技能は、「読むこと」、「聞くこと」、「書くこと」、「話すこと（やりとり）」、「話すこと（発表）」の5つの領域に分けられ、CEFRの技能と同じ領域となった。また、習得する語彙数も中学では現在1200語であるが、小学校で習得した語彙に加えて1600～1800語と増加している。

現状のセンター試験と2次試験や多くの私立大学で行われている1技能、もしくは、2技能しか測らない入試は多くの問題点がある。特に、現在、多くの大学で行われている入試は、高等学校の現行学習指導要領の4技能の統合を図ろうとする「英語コミュニケーション」、発信力（スピーキングとライティング）を強化する「英語表現」と整合性がないことは問題である。

このような入試の問題点を克服するために、外部英語検定試験を入試に利用する私立大学や国公立大学が増えている。特に、スーパーグローバル大学に選ばれた大学では、それぞれの構想調書に外部試験の現在の活用状況や将来の目標を記しているため、4技能入試が積極的に採用されている。

このシンポジウムでは、小・中・高の英語教育改革という一貫した流れの中での入試改革については小幡氏、現状の大学入試の問題点については安河内氏、最後に入試改革を既に行った大学の現状については藤村氏にそれぞれの話題について述べてもらう。その後、皆さんの高大接続に関する質問や疑問点をパネリストにさせていただく。

## <発表要旨>

小幡泰弘

2020年は、英語教育にとって、大きな転換期になる年になります。小学校で3・4年で外国語活動、5・6年で教科としての外国語が完全実施されます。また大学入試においても、「大学入学共通テスト」の枠組みにおいて、高校3年生が民間の英語資格・検定試験を受けることとなります。今回の小・中・高等学校の学習指導要領の改訂では、「何ができるようになるか」という観点から、国際基準（CEFR）を参考に、小中高を通じて、4

技能5つの領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」）別の目標を設定しています。英語力調査の結果を見ても、一番の課題は、高校3年時に「話すこと」「書くこと」のレベルが伸びていないことです。英語を用いて授業を行う教師の割合は、中1から高3に学年が上がるのにつれて下がっています。現行の学習指導要領でも4技能を総合的に育成することとしており、一層の授業の改善が必要であると考えています。また、現在の大学入試センター試験ではリーディング、リスニングの2技能しか評価できていませんが、高校までの英語教育で育成しようとする能力の方向性を考えれば、4技能を評価することが必要であると考えます。今回の改革は、小中高の英語教育と大学入試を合わせた一貫した改革であり、大きな一歩であると認識しています。現在、既に小学校では移行措置・先行実施が始まり、大学入試では参加する民間の資格・検定試験が発表されています。小中高の英語教師の指導力の向上や民間試験を活用することによる経済的・地域的格差など課題もあります。文部科学省として、2020年に向けて、関係者のご理解をいただきながら、円滑に実施できるよう取り組んでまいります。

藤村正之

上智大学では2015年度入試からTEAP利用型入試を新たに実施しており、本報告ではその制度紹介と実施動向について報告することとしたい。TEAP（Test of English for Academic Purposes）は日本英語検定協会と上智大学の共同開発という形で進めてきた、日本の高校生・大学生の能力レベルを考慮した英語検定試験である。高校・大学時代を通じた共通のスケールにて英語4技能「読む(R)」「聞く(L)」「話す(S)」「書く(W)」の実力向上を測定しようとするものであり、英検協会により2014年から実施されている。上智大学ではこの検定試験を「TEAP利用型入試」として2015年度から入学試験に使うこととした。その骨子は英語検定試験としてTEAPの事前受験をしてもらい、その成績によって出願可否が決まり、本学での試験としての2科目入試（文系では国語と地歴・公民、理系では数学と理科）の受験をする入試タイプとなる。本学での2科目入試においては一部に記述式問題を導入することとし、思考力・表現

力を見ることも課題としている。この入試では、TEAPは出願基準としてのみ使い、得点化はしていない。受験生から見れば、英語が入学試験当日の一発勝負でなくなるものの、通年を通じた英語能力の向上が求められることになる。実際の入試の受験者数としては、初年度は2技能のみとしたこともあり、9000人台と多くの受験生を集めたものの、その後2年目に4技能を一部学科で、3年目からは全学科に導入したことで、2年目、3年目は4000人台の受験者であったが、次第に定着してきたか、4年目の2018年度入試は6000人台ということになった。上智ではTEAPを入学試験利用のみに限定的に位置づけるのではなく、大学入学直後のレベル別の英語クラス分けに使い(2技能)、4技能に準拠した英語科目Academic Communicationを1年間履修した後の1月のレベル確認テストにも用いている。高校と大学をつなぎ、大学時代の英語の実力の成長も測り、留学用のTOEFLなどへつないで併用していくことなどを想定している。

安河内哲也

2020年度より開始となる大学入学共通テスト英語科目では、文科省に認定された複数の4技能試験が活用される。これらの4技能試験は国際基準であるCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)を介して対照され、CEFRレベルにおける達成度が選抜において活用されることとなる。移行期間の4年間並行して行われる、マーク式の試験もCEFRに準拠したものとなり大幅に変更される。この共通テストに加えて、大学個別の入試でも4技能試験の活用が進んでいる。このような入試の大きな改革の背景に急速に進むグローバル化がある。大学入試はたいへん大きな影響を現場にもたらしているが、入試問題、予備校・出版社、進学校が絡み合い、指導要領通りの英語教育が困難となっている。今後使用される資格試験とそのウォッシュバックを考える際には、TLU(対象使用言語領域)、出題形式、実施方法等の点から、それぞれの試験の特徴を考察する必要がある。それぞれの試験が、どのようなウォッシュバックを現場にもたらすかを予測するためには、それらの要素を複合的に考える必要がある。また、今後、使用される資格試験には、さらなる安全性や公平性が求められることとなる。それぞれの試験の課題を洗い出し、具

体的な改善策を練り、問題解決に取り組むことが急務である。施行まで2年を切った今、高校生が安心して大学入試選抜に臨めるよう、試験機関が何をやるべきかを議論することが重要だ。

## 【特別シンポジウム2】

### New Learning Outcomes in English Education Based on the Revised Course of Study

#### 次期学習指導要領を踏まえた 英語教育の新たな学習成果

提案者：向後 秀明(敬愛大学)  
(前 文部科学省初等中等教育局教育課程課  
国際教育課外国語教育推進室 教科調査官)  
村野井 仁(東北学院大学)  
松尾 美幸(岩手県立不來方高等学校)  
提案者・司会者：村野井 仁(東北学院大学)

2020年度より、小学校から順次施行される次期学習指導要領によって日本の英語教育にはさまざまな抜本的变化がもたらされることになる。その中でも注目を集めているのが、小学校高学年における外国語(英語)の教科化と小学校中学年における外国語活動の導入である。これにより、小学校から中学校・高等学校へとつながる10年間の教育課程の中で、何をどの段階でどこまでできるようにするのかを明確にして、確実な学習成果を上げることがめざすことになった。高校卒業時にはCEFR B1レベルの能力を目標とすることも示されており、現状の英語力達成状況から見るとかなり高い目標が設定されたこととなる。

さらに次期学習指導要領では、教育課程において「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の3つを育成することが求められている。教師はこれらの資質・能力と英語の5つの領域における到達目標を組み合わせることによって、明確な目標を立て、目標達成に向けて指導・評価方法の改善をしていかなければならない。教科の「見方・考え方」を示しながら、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善も求められており、学習内容・方法そして学習成果の検証方法全てにおいて抜本的な見直しが必要となっている。



このような状況を踏まえ、本シンポジウムでは、異なる立場に立つ3人の登壇者から学習指導要領改訂による英語教育改革に関する提言と議論を行う。向後は次期学習指導要領改訂の背景と趣旨を踏まえながら、文部科学省のねらいを解説する。村野井は、第二言語習得理論の観点から改訂のポイントについて考察し、それを教科書編集等にどのように反映させるべきか提案を行う。松尾は高等学校での実践に基づき、英語到達目標の設定とその指導及び成果の検証の課題について論じる予定である。会場の参加者との質疑応答も行き、英語教育のあり方について考えを深める機会としたい。

## 【東北支部企画特別講演】

### Don't be Afraid of Intonation!

Prof. John Wells (Professor Emeritus,  
University College London)

English has a rich intonation system, which can seem daunting both to teachers and to learners. We should concentrate on those teaching points that can readily be understood and learnt. In my view, this means concentrating on tonicity (also known as accentuation or placement of the nucleus/tonic). Furthermore, most English sentences can be given a variety of possible intonation patterns: for the learner, there are typically numerous right answers to the problem of what tone would be acceptable, while the tonicity is in general determined by the pragmatics. Hence the most important goal should be mastery of tonicity. Most learners need not worry about fine details of pitch contours, although an ability to distinguish between falling and rising tones is undoubtedly useful. Quality is best assured by teaching what is both useful and true.

## 【東北支部企画シンポジウム】

### Teaching English Pronunciation for Elementary School Teachers of English

Panelists: Hiroshi Matsusaka (Waseda University)

Kaoru Tomita (Yamagata University)

Special Guest Commentator: John Wells  
(Professor Emeritus, University College London)

Chair & coordinator: Tetsuo Nishihara  
(Miyagi University of Education)

This symposium is based on special lectures conducted as part of a joint project (Integrated Training Program for Elementary School Teachers of English in Tohoku Area) between Miyagi University of Education (Division of English Education Course and Research Institute for Capacity Development of Educators, Elementary School English Education Research Division) and Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. The special lectures were held mainly for elementary school teachers of English to improve their skills and instruction of English teaching, pronunciation, vocabulary, grammar, English communication, and understanding foreign cultures in their elementary school classes. Accordingly, in this symposium, we will first focus on the teaching of English pronunciation to elementary school students in terms of theoretical and practical viewpoints in various speaking fields. Next, the panelists, Professor Matsusaka and Professor Tomita, would like to discuss possible problems which elementary school teachers of English may face in their classes. Also, they will introduce methods of English phonetics that they should focus on for elementary school students to learn accurate and current English pronunciation of both word level structure and sentence level structure (e.g., Segments (consonants and vowels), Suprasegmental (stress, intonation, and rhythm), and Connected Speech). Finally, we would like Professor Emeritus John Wells to give us comments and suggestions to improve our lectures from the point of view of a

distinguished phonetician.

Kaoru Tomita

### <Abstract>

Hiroshi Matsusaka

This talk comments on the extent to which current and future elementary school teachers are prepared to teach English pronunciation and suggests that they would benefit from increased opportunities to receive training in this area. The talk centres on a survey put together by Kaori Sugita, Graduate School of Education, Waseda University, and myself and conducted during the training seminar in teaching English held at Miyagi University of Education in 2017. The respondents were seminar participants: elementary school teachers and students enrolled in the teacher training programme at the university. The purpose of the survey was to investigate the way in which the seminar participants assessed their readiness for teaching each of nine specific pronunciation teaching points of our choice (one sound and eight minimal pairs). The survey was based on an assumption that, as regards any specific teaching point, teachers progress through certain stages, from the initial pre-training stage to the final stage at which they can correct a learner's error. Thus, our survey asked respondents to indicate, for each of the nine teaching points, where in the skill development process they think they stand. Six stages were presented to them (in Japanese) to choose from: (1) I did not know the phonetic fact prior to this seminar; (2) I know the phonetic fact; (3) I can articulate the sound(s); (4) I can assess a learner's articulation; (5) I can explain how the sound(s) should be articulated; (6) I can correct a learner's erroneous articulation. The results on every one of the nine teaching points suggest that teachers need more training in teaching that particular point. The results seem to suggest also that more time should be allocated to pronunciation in general in the training of English teachers.

Potential benefits gained from visualizing English sounds for teaching pronunciation in Japanese primary school is discussed. In English language there are plenty of phonetic features which Japanese speakers might find difficult to produce or perceive. Discrimination of vowels in "heed-hid", "had-hod", or "hood-who'd" is one of them. Articulatory properties of these six vowels can be visualized with making use of acoustic analyses of formant one and two. Feedback from learners about methods of pinpointing each vowel in a vowel space and comparing it with the one by a native speaker is introduced; "It was the first time for me to analyze my own vowel pronunciation. I felt a little nervous. The result showed that vowels in "heed" and "hid" were discriminated very well. I felt happy. Vowels in "hood" and "who'd", however, did not show much difference. I felt sorry for that." Visualization of vowel space for language learning is sure to help learners to let them to have a special interest to their pronunciation from primary to tertiary English education.

## 【AILA-East Asia シンポジウム】

### Assuring Quality Outcomes in English Education

<The 5th AILA-East Asia Symposium>

Panelists: Junkyu Lee (ALAK)

Luo Shaoqian (CELEA)

Atsuko Watanabe (JACET)

Discussants: Haemoon Lee (ALAK)

Miao Xingwei (CELEA)

Masaki Oda (JACET)

Chair: Chitose Asaoka

Coordinator: Hisako Yamauchi

A common feature among the AILA-East Asia countries is the increasing rate of high school graduates entering colleges and universities every year. In Korea, more than 90% of high school graduates today enter colleges and universities. In China, the number of college

students already exceeds 7 million. Although the rate of increase is much smaller than the other two countries, the Japanese rate is still increasing. When the college entering rate becomes more than 50%, it is called “popularization of college education.” Korean and Japanese colleges are already in this category, and China is expected to reach the category this year. “Popularization of college education” is a good phenomenon because more young people have the opportunity to receive higher education. However, it may also accompany other problems. One of them is the widening divide in abilities among college students, and English ability is not an exception. Therefore, how to assure quality outcomes in English education is the next important assignment for English teachers to deal with.

Three speakers of AILA-East Asia will introduce their efforts to maintain quality outcomes of their students’ English abilities, which will give us great suggestions. They will also inspire us how we can increase the effectiveness of our English teaching.

The first speaker is, Dr. Junkyu Lee, representing ALAK. The second speaker, Dr. Luo Shaoqian, represents CELEA. The last speaker is Dr. Atsuko Watanabe who represents JACET. We expect a good, lively discussion with all the participants.

### **Trends in English Education Research in Korea**

Junkyu Lee  
(Hankuk University of Foreign Studies)

In order to address the 2018 AILA East Asia symposium topic of “Assuring Quality Learning Outcomes in English Education”, this work provides the overview of English education research in Korea over two decades, with an assumption that research would influence practices. The research trends in Korea are analyzed by examining two major English education related journals in Korea, Korean

Journal of Applied Linguistics and English Teaching. In particular, this study investigates chronological changes in English education research in Korea including research areas (e.g., four skills), pedagogical choice (e.g., CLT, FFI, TBLT), research setting (e.g., lab vs. classroom), outcome measures (e.g., comprehension vs. production), use of technology and types of research (quantitative vs qualitative). The direction for future research is discussed in relation to the findings of this study.

### **The Arts of the Impossible and the Making of Curriculum in China**

Luo Shaoqian  
(Beijing Normal University)

In this presentation, we first introduce the curriculum making, the art of impossible in China, in 2001 when a nation-wide education reform started. Then we explore the ideology behind the revision of the curriculum in 2011 and 2017. Finally, we discuss both challenges and tasks of the curriculum scholars in China. The National English Curriculum Standards for Compulsory Education and Senior High Schools (NECS) (MOE, 2001) was promulgated in 2001. It (1) promoted quality education and learner-centred teaching, (2) specified the goals of ELT, (3) set performance standards to guide classroom teaching and assessment activities, (4) promoted task-based, discovery and experiential learning, and (5) required the use of both formative and summative assessment methods to evaluate students’ learning.

In 2014, the Chinese MOE first proposed the concept of core competencies in an official document entitled Suggestions on deepening the curriculum reform to endorse the mission of moral education and endorsed. The framework of developing Chinese students’ core competencies on September 13, 2016 (MOE, 2016). In order to respond to the government call and to further the curriculum reform, the general curriculum goals need to be re-conceptualized and a core

competence framework for all school subjects has been proposed (Lin, 2016). The new framework consists of four core competencies, i.e., language competence, cultural awareness, thinking capacity and learning ability (MOE, 2017).

With the re-conceptualized competence-based framework, English language education faces challenges which include (1) educating teachers the core competencies; (2) the implementation of the core competencies in classroom teaching; and (3) the testing of the core competencies.

**Assuring Quality Outcomes through  
Reflection by Teachers and Students:  
Alternatives for the ‘Check’ Phase in the  
PDCA Cycle**

Atsuko Watanabe  
(Bunkyo University)

Due to the trend of “popularization of college education” in Japan, assuring quality outcomes has become a pressing issue in English language education at the tertiary level. To this end, it will be important for each university to reinvigorate its mission with respect to diploma, curriculum, and admission policies. Assuring quality outcomes is an endeavor which is relevant to individual teachers as well as to the organization. In this symposium, I will promote the idea of the activity of reflection for both learners and teachers as a means to assure quality outcomes in tertiary education in Japan. First, I will introduce the concept of reflection. Next, I will explain how it contributes to assuring quality outcomes. I will then show how the PDCA (Plan-Do-Check-Act) cycle, generally acknowledged as the prevailing framework used to foster reflectivity, is designed in such a way as to be more applicable to the evaluation of organizations. Specifically, one key feature of reflection is to be able to look at one’s experience through alternative perspectives. This is the purpose of the “check stage” in the PDCA cycle. However, it is my belief that the ‘C’ phase does

not sufficiently guide individuals to gain such perspectives and thus to foster reflection. In order to address this need, I will conclude by offering alternative frameworks of reflection for both learners and teachers.

**【提携学会招待講演 1】**

**How Disrupted are Our Learning  
Outcomes Today?  
Making a Case for “New” Quality  
Learning Outcomes**

Jeffrey Mok  
(SEAMEO Regional Language Centre, RELC)

In our current knowledge-based and globalized world of teaching and learning, how do we now understand quality in our educational programmes? Is there a new understanding of quality learning outcomes? How have the current winds of change in education impacted our learning outcomes? In turn, how do we craft and measure these “new” learning outcomes? The presentation will begin with the global influences such as digitization and industrial revolution 4.0 that has disrupted the perception of educational quality and the learning outcomes for our learners today. A framework of these influences will be presented together with a proposal on how these global changes have impacted on our learners’ expectations of learning, teaching processes, assessment and learning environments. In the light of the current winds of change, several higher learning institutions in Singapore have responded to these changes. The presentation will draw upon a case study on one such higher learning institution in Singapore. Examples of these “new” quality learning outcomes and ways of measuring them will be presented and discussed.

## 【提携学会招待講演2】

### Enhancing EFL Learners' Language Proficiency through Essays

Leung Yiu-nam  
(National Ilan University, ETA-ROC)

Enhancing ESL/EFL learner's language skills has always been a very important component in classroom language teaching in Taiwan, where English is still considered as a foreign language. Consequently, instructors try their best to find ways of improving student's language skills through various means and strategies. Ways of enhancing students' language skills, undoubtedly, are multifarious. A case in point is via selected English essays. Essays, among the other genres, constitute one of the good teaching materials, for they are short, interesting, and encompassed a lot of writing techniques as well as profound messages. They are quite acceptable and manageable to the students in my class. This presentation is by no means research-oriented; instead, it reports on the researcher's classroom teaching experience based on a course offered at a college level designed to increase students' language skills through the selected English essays. Taken into consideration of learners' language proficiency, the researcher selected the essays whose length is about 3 to 5 pages so that the students could finish their reading assignments according to the time allocated to them. Learners also know the different types of essays which are helpful to their writing class. A quantitative study on the effect of reading essays and its findings will be discussed. It is hoped that learners' English proficiency, their critical thinking, and their organizational, interpretational, and thematic awareness will greatly be improved through reading and studying essays.

## 【提携学会招待講演3】

### Implementing a Policy of Absolute Grading for CSAT English in Korea

Young Shik LEE  
(Hannam University, KATE)

In Korea, the purpose of the College Scholastic Ability Test (CSAT) is to assess students' academic capacity to enter the university by testing whether they have truly followed the school curricula faithfully. It appeared that the assessment system until 2016 has focused on relative ranks among students, but has caused excessive competition to get the highest scores possible over the last twenty years, resulting in higher spending on private education (hagwon). Particularly the cram schools' English classes disproportionately concentrate on skills to solve CSAT questions rather than genuinely improving communicative abilities. In December 2014 The Ministry of Education announced that it would adopt an absolute grading system (AGS) for English scores in the CSAT, starting from November 2017, and discard the norm-referenced grading. The MOE hoped that the AGS of CSAT English would eventually serve to normalize English education by having teachers place more emphasis on improving students' communication skills rather than on solving CSAT questions. This presentation describes the rationale behind the implementation of AGS for CSAT English by the MOE and how the criteria and grades of AGS have been developed and set. Then it deals with perceptions by contemporary teachers and different stakeholders of English by touching on the pros and cons. Finally, it discusses the consequences of AGS for CSAT English in comparison with the other subject tests of CSAT such as Korean and math.

## 【提携学会招待講演 4】

### A New Multiword Unit Analysis Tool: ColloGram

Shin, Dongkwang  
(Gwangju National University of Education, KATE)

Multiword units receive attention as being an essential part of vocabulary knowledge that will expedite the learning and use of a second language (L2). However, there is lack of a graded general multiword unit (MWU) list that can offer direct applications for pedagogy. The current article reports on the development and evaluation of COCA Multiword Unit 20 (COCA\_MWU20) where the notion of MWU family is first applied. The compilation involved selecting and grading the MWU by grammatical well-formedness, range, and frequency. That is, the criteria to extract the COCA\_MWU families were Min. Range 4 from the COCA 5 domains and Min. Frequency 20. In the end, the 10,000 MWU families which made up the COCA\_MWU20 list were utilized in the development of ColloGram, a list-based MWU family analysis program. The MWU family list topped on the ColloGram program is called COCA\_MWU20 where 20 indicates the number of graded 500-item bands. The functions of ColloGram are similar to those of RANGE, the vocabulary analysis program, by Heatley and Nation (2002). The program identifies MWUs where all the words are immediately adjacent to each other (that is, continuous MWUs, Max. 10 words). Finally, a subtractive method (Martinez & Schmitt, 2012) was adopted to produce a more accurate frequency figure of the MWUs in developing ColloGram. For example, *as opposed to* can be subsumed under *opposed to*, a head MWU. However, in order to obtain the exact frequency for *opposed to*, there was need to subtract the number of occurrences of the string *as opposed to* (1,615) from the number of times the bigram *opposed to* appears in the corpus (2,674). That is, the true frequency of *opposed to* is 1,059. With the use of ColloGram, the COCA\_

MWU20 list was validated in Wellington Spoken Corpus and Wellington Written Corpus. By highlighting the most important general MWU, the COCA\_MWU20 can help L2 learners increase their knowledge of lexical items beyond single words and guide L2 teachers to conduct syllabus design. The ColloGram can also provide an analysis tool for researchers who are interested in analyzing MWU. The Program 'ColloGram' is downloadable at <http://cfi.le281.uf.daum.net/attach/99EBA0495A80F110304D74>

## 【提携学会招待講演 5】

### The Role of Cognitive Load of Task for Learner Attention and Incidental Vocabulary Learning: An Eye-tracking Study

Haemoon Lee  
(Sungkyunkwan University, ALAK)

Incidental vocabulary learning can be explained by two complementary hypotheses, namely, the involvement load hypothesis (Hulstijn & Laufer, 2001) and the noticing hypothesis (Schmidt, 1990). Whereas the involvement load is a task feature that operationalizes the depth of processing model ( Craik & Lockhart, 1972), noticing is a learner-internal process of paying a focal attention to an unknown form. Noticing occurs when learner meets an unknown form and tries to map its meaning to its form. It requires attention as a response to the cognitive load imposed by the task. The present study indicates that the mixed findings about the effect of involvement load for incidental vocabulary learning through reading may be due to the failure of the task in inducing learner attention properly. Therefore, the effect of task-induced involvement (cognitive) load for incidental vocabulary learning should be examined in terms of the critical learner-internal process of attention and noticing as a mediating variable.

In this study, the involvement load was

designed in a reading comprehension task for incidental vocabulary learning by two levels, reading with and without marginal glosses. Other relevant conditions for incidental vocabulary learning through reading comprehension (Nation, 2001), percentage of unknown words in the reading text and the frequency of exposure, were controlled as well. Also, six natural texts were selected from COCA corpus and the target words were selected that were considered task-essential as much as possible. Learner attention was measured by eye-tracking.

The results indicated that both groups learned and retained the target words significantly until two weeks later. However, a between-group difference was found in the immediate post-test, the Gloss group outperforming the No Gloss group. This between-group difference disappeared after two weeks in the delayed post-test. ANCOVA and correlation studies indicated that the Gloss group remembered the target words at the immediate post-test in correlation with the score of comprehension of the text which might be still vivid at the time of the test, whereas the No Gloss group did not. The correlation, however, disappeared two weeks later in the Gloss group, whereas the correlation between the scores of vocabulary pretest and the delayed post-test was found in the No Gloss group. In line with this difference, the relatively stronger retention observed by the No Gloss groups appeared to be associated with the longer eye fixation on target words and more frequent fixations per word by this group, in support of attention as the important mediating variable.

## 【提携学会招待講演6】

### Using Artificial Intelligence to Interact with Technology for EFL Speaking Practice

Robert Chartrand  
(Kurume University, JALT)

Recently, there have been a number of innovations in Speech Recognition (SR) to enhance the ability of technology enabled devices to interact with human beings and conducting simple conversations, perform commands and enhancing the Human-Computer Interaction (HCI). The basis of this interaction is the ability of the device to understand the spoken language and to interpret it so that it can understand the meaning. Although the Voice User Interface (VUI) of computers and mobile devices to recognize English speech can be as high as 95%, the ability to respond to such speech depends on a conversational corpus and Artificial Intelligence (AI) algorithms. Native speakers can make use of such devices to transcribe speech to text, ask simple questions such as, “What is the weather in Sendai today?”, “What is the name of the Prime Minister of Japan?”, or ask the device to make an appointment and so on. Language learners can use such advanced methods for self-study and conversation practice. The problem lies in the ability of the foreign language learner to produce language that is native-like so that the device can understand the speech. Factors such as pronunciation, grammar mistakes, word order and use of proper vocabulary all contribute to the ability of the device to understand the spoken language. With guidance, the language learner can use this technology to practice speaking some set expressions and thus focus on the skills that will help build confidence and motivation to learn a language. As the algorithms of these devices advance from a command-based structure to a more conversational one, there is a great potential in using this technology to

empower language learners. The presenter will demonstrate some of the techniques that can be used for such practice and will encourage discussion on this new and relevant topic.

### 【提携学会招待講演7】

#### Continuing Professional Development Programs for Quality Outcomes in English Language Classrooms

Ramesh Nair  
(Universiti Teknologi MARA, MELTA)

Undoubtedly, Continuing Professional Development (CPD) programs play an important role in equipping in-service teachers with new skills and knowledge necessary to keep up with the evolutionary nature of education. In Malaysia, ongoing reforms in English Language Education have led to emphasis on the professional development of English language teachers. This is quite rightly so given the fact that teachers are the drivers of change in the reform process. In this presentation, I reflect on the nature of CPD programs for Malaysian English language teachers. Based on a critical reading of a policy document and a series of media texts that make references to English teachers and the English Language Education reform process, I report on the discursive construction of a collective identity for Malaysian English language teachers. I attempt to show how this collective identity has had consequences for the way CPD programs have been designed in the reform process. Finally, I suggest that the existing CPD initiatives have failed to draw on the multiple approaches available for designing CPD programs, and this, to some extent, jeopardizes the desired quality outcomes expected in Malaysian English Language classrooms.

### 【提携学会招待講演8】

#### Promoting Outcome-Based Teaching and Learning in English Pronunciation Course: Students' Learning Outcomes, Attitudes, Motivation, and Learning Development Strategies

Niwat Wuttisrisiriporn  
(Burapha University, Thai-TESOL)

Outcome-based teaching and learning (OBTL) has been promoted to facilitate today's teaching and learning. The approach emphasizes students' learning outcomes through blending contents, delivery, tasks/activities together with assessments that are able to help attain particular intended learning outcomes. This paper is aimed (1) to explore how OBTL is able to facilitate Thai university students' English pronunciation development and (2) to investigate how the OBTL pronunciation course affects students' attitudes, motivation and learning development strategies. The participants of the present study are 90 non-English major students having enrolled in English pronunciation course. The research instruments used to elicit research data are composed of three parts: (1) pre- and postpronunciation tests of English sounds (at word, sentence, and paragraph levels) to describe problems of the participants' English pronunciation and to measure their pronunciation development after the course, (2) a questionnaire to elicit the participants' attitudes and motivation towards their pronunciation development, and (3) students' learning tasks, activity record, and reflexive report. In this session, I will share how I design this OBTL English pronunciation course, which is one of the most significant parts, and how I conduct the course. I will also present the students' pronunciation learning outcomes as reflected by pre-and post-test scores, learning activity record, and all the tasks assigned. Students' attitudes and motivation will be discussed, and I will reflect challenges of conducting this OBTL course.



## 【提携学会招待講演9】

### A Case Study on the Change of Reading Teaching Belief and Practice in a Senior High School English Teacher: From the Expansive Learning Theory Perspective

Sun Xiaohui  
(Beijing Normal University, CELEA)

With the re-conceptualized competence-based framework, English language education and teacher education in China faces challenges. Meanwhile, the field of foreign language teaching in China is undergoing a profound reform and innovation, and fostering students' core competencies in English is the key to deepening the development of this curriculum reform. In order to help English teachers get the knowledge of the core competencies and help them implement the core competencies in classroom teaching so as to improve students' core competencies at last, a reading teaching improvement project based on the cooperation between university English education experts and middle school English teachers comes into being.

The present study follows a four-month reading teaching improvement project and explores a senior high school English teacher's change of reading teaching belief and practice by using the diachronic case study method. Field observation, semi-structured interview, teacher's reflective journals, and related objects were used to collect data. It is found that the senior high school English teacher has gradually changed his reading teaching belief and practice during the reading teaching improvement process which indicates the seven steps of the expansive learning process. Different characteristics of the senior high school English teacher's change of reading teaching belief and practice can be seen on the four stages of concept transformation of the expansive learning process. On the Intuition stage, the senior high school English teacher has

a deep reflection on reading teaching objectives and the key points and difficulties of reading teaching; on the Explanation stage, the senior high school English teacher has enhanced his reading text reading consciousness and teachers' role consciousness, improved his reading class management ability and reading curriculum design ability. On the Inductive integration stage, the senior high school English teacher's understanding on the role of teachers and students is clearer, his ability on the reading curriculum design and implementing reading teaching methods has been greatly improved, and his evaluation method on reading teaching is more reasonable. On the Institutionalization stage, the senior high school English teacher can continuously use the scientific reading curriculum design methods and reasonable reading teaching methods. Such research results have important implications on the in-service English teacher education.

## 【特別ワークショップ1】

### CLIL principles and ideas in diverse contexts

Shigeru Sasajima (Toyo Eiwa U.)  
Kazuko Kashiwagi (Osaka Kyoiku U.)  
Yuki Yamano (Utsunomiya U.)  
Taizo Kudo (Nagoya Gakuin U.)

This workshop will focus on CLIL practical issues in the Japanese context: CLIL teacher education, CLIL activities in primary education, and CLIL lessons in secondary and tertiary education. Shigeru Sasajima first talks about CLIL principles and ideas in diverse contexts, and then each presenter shows their practical ideas of CLIL in each educational stage.

### Implementing the use of drama plot in CLIL lessons through overseas teaching practice

(Kazuko Kashiwagi)

This session discusses the project of "Overseas Teaching Practice in Finland (EU)" using CLIL.

The project aims at fostering: 1) 21st century skills, 2) English skills to instruct active learning, and 3) cognitive skills for teaching. The student teachers developed a drama in CLIL for EFL pupils utilizing Usage-Based Model and dictogloss, and a positive influence of CLIL was accordingly observed when the pupils contemplated the cause and effect while acting out. Both the student teachers and pupils produced the highest production possible.

### **CLIL activities for early EFL education in primary education**

(Yuki Yamano)

EFL education at primary school was implemented in the 21st century, and effective language teaching has therefore become a critical need. In this workshop, participants can experience CLIL activities for early EFL education. This session seeks to explore the components of an effective program and demonstrates how CLIL can be applied in order to facilitate L2 learning in a primary EFL context.

### **Education for sustainable development (ESD) and CLIL in secondary and tertiary education**

(Taizo Kudo)

This session reports on cases of implementations of CLIL lessons that are aimed at raising students' awareness and thinking skills for ESD. These cases of implementations have particularly focused on developing the students' higher-order thinking skills (HOTS) as well as their lower-order thinking skills (LOTS) by incorporating collaborative activities in which the students discuss how to solve or improve some problems on global issues in groups.

## **【特別企画ワークショップ2】**

### **How to Write Research Papers for International Journals: Creating a Research Niche and Occupying the Niche**

Yasuo Nakatani (Hosei U.)

This workshop shares practical approaches to writing research papers for international journals. The contents are based on the analysis on referees' roles and research paper corpus containing 1.5 million words. Writing a research article is the process of negotiation with you readers such as editors and reviewers of journals. These readers are authorities who have sufficient knowledge on your study area. You need to remember that they are very busy for conducting their own study as well as evaluating many new papers. In order to persuade them, you should effectively use discourse strategies for academic writing.

We start from reviewing the level of expectations of international academic discourse community by examining evaluation guidelines of representative journals. Then we see how to write appropriate literature review to highlight your research credit.

First you should claim the centrality of the research by using relevant booster expressions. The results of the corpus analysis reveal that there are five types of the boosters as follows: multitude, breadth, tradition, regency, and significance. By effectively combining these elements, you can appeal the importance of the themes. As the next step, you should argue how your research is sufficiently novel and interesting for the publication. This can be done by pointing out limitations of previous studies. You need to challenge some of representative studies and inform inadequacies of their research design. The corpus data show that there are five aspects to indicate a research gap. They are the relevance of sample choices, experimental conditions, research tasks, data collection and analysis, and

the theory or model which the author utilize in the article. By critically reviewing these points, you can create your significant research territory. After achieving these goals, you should announce principal findings of your research. Workshop participants can experience how to create their own research niche and occupy the niche.

## 【特別委員会シンポジウム】

### The Status Quo of Tertiary Level English Teachers in Japan

#### 大学英語教育の担い手の今

司会：上田倫史（駒澤大学）  
発表者：照井雅子（近畿大学）  
吉田諭史（早稲田大学）  
尾関直子（明治大学）  
富田かおる（山形大学）

1980年以來、実態調査委員会（大学英語教育学会）は、第1次、第2次、第3次と3回にわたり結成され、大学英語教育の実態を調査してきた。急速なグローバル化が進む社会情勢に伴い、初等・中等英語教育、大学入試は、大きく変わりつつあるが、大学英語教育にどのような変化があったのかについては、近年調査されていない。そこで、今回、第4次実態調査委員会が大学英語教育を担う英語教員に関して実態調査を行った。全国のJACET会員をはじめ、865人にも及ぶ大学の英語教員が質問紙調査に参加してくれた。

今回の調査の結果、2003年の実態調査以後、大きな変化が大学英語教員の資質、仕事内容、環境に起こったことが分かった。例えば、2003年の調査では、英語教員の博士号取得者は10.1%しか存在しなかったが、今回の2017年の調査では、46.7%もの教員が博士号を取得していた。また、終身雇用の専任教員の数が減っているのに対して、2003年にはほとんど存在しなかった任期付き教員の数が増加していることも分かった。他にも、2003年の調査では、教員の所属先に関する質問の選択肢にも入っていなかったセンター所属の英語教員が今回の調査では、全体の20.6%を占めていることも判明した。

英語教員が働く環境に関していえば、学生数の

減少による私立大学の経営状態の悪化、国からの運営費交付金の減額による国立大学の資金難、学長の権限の増大などが起因し、英語教員の労働状況も悪化していることが分かった。例えば、到達できそうもない英語の習熟度の目標を強要されたり、教育や研究の他にさまざまな委員会や学生の海外留学関係の業務などを担当し、忙殺されている日常を送っていることが判明した。

第4次実態調査委員会では、今回の調査結果をふまえ、「英語教育の専門性を活かせる英語教育の位置づけ」、「若手が活躍できる環境整備や若手の人材育成」などに関して国や社会へ積極的に提言していく予定である。

## 【賛助会員特別シンポジウム1】

### The use of externally produced four-skills English tests for university admissions: Toward a successor for the Center Test

#### 大学入試における外部検定試験の活用状況と展望～センターテスト後継を見据えて②

三橋 峰夫  
（一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会）  
根本 斉  
（国際教育交換協議会）  
塩崎 修健  
（公益財団法人日本英語検定協会）

2018年3月26日に、大学入試センターによる、「大学入試英語成績提供システム」の参加要件の確認結果が公開された。7団体8テストが参加要件を満たしている事が確認され、2020年度より始まるセンター試験の後継となる「大学入学共通テスト」の一部として活用されることとなった。英語教育において、「話すこと」「書くこと」「聞くこと」「読むこと」の四技能の評価を推進することへの理解は確実に進んでいるが、成績提供システムに対する世間の見方は、受験機会の均等性やCEFRをベースにした各検定のスコア設定などについての疑問の声もあり、今一度立ち止まって十分に検討すべきという論調が少なからずある事も事実である。

大学英語教育学会（JACET）では、京都大学で

開催された第52回（2013年度）国際大会での全体シンポジウムを受けての提言「京都アピール」を始め、これまでに様々な機会を通じて、大学入試と外部検定試験とのあるべき姿について検討を重ねてきた。とくに、広島市立大学で開催された第53回（2014年度）国際大会での全体シンポジウムでは、「大学英語教育における『教育の質保証』に向けて—「外部試験」導入の議論を通じて—」というテーマの下、当時の外部検定試験の概要と取り巻く状況を踏まえながら、国際ビジネスコミュニケーション協会（IIBC）・国際教育交換協議会（CIEE）・日本英語検定協会（英検）の三団体の関係者に登壇いただき、議論を行っている。また、昨年度、青山学院大学で開催された第56回国際大会（東京、2017）においても、大学入学共通テストへの対応という議題で、同三団体によるシンポジウムが開催されている。

成績提供システムの要件審査結果が公開された今、大学や高等学校をはじめ、日本中の教育機関が公私を問わず、その対応に動き出している。外部の検定試験団体から多極的な観点で議論の整理を行っていただくことは、2020年度に向けての準備という点で、大学だけでなく、初等中等教育の英語教育関係者にとっても有意義なことである。

そこで、本大会の特別シンポジウムでは、これまでの三団体に高大接続という視点から英語運用能力の評価についての包括的な議論を行うこととする。具体的には、高等学校を中心とする中等教育での検定試験の導入状況や活用状況や大学英語教育における検定試験の導入状況や活用状況をそれぞれ説明いただき、現時点での実施状況や展望を明らかにしたい。また、当システムの要求に応えるために各団体が行った対応についても紹介いただき、制度の信頼性についても議論を深め、何よりも本制度の導入が大学英語教育の質の向上に繋がるものであるかどうかについても検討し、今一度、大学入試のあり方を見つめ直す場としたい。

この特別企画を通じて、国内外の英語教育分野がより一層活性化することを狙い、賛助会員企業と一般会員の交流が盛んになることを目指す。これにより、本国際大会が産学交流の場として盛り上がり、ひいては日本の大学の国際化が一層促進されることを期待する。

## 【賛助会員特別シンポジウム2】

### What will English Education Be Like in the Next Ten Years? A Focus on Teaching Materials at the Tertiary Level

#### 10年後の英語教育を考える —大学英語教材に焦点をあてて—

朝日 英一郎（朝日出版社）  
笹尾 洋介（京都大学）  
加藤 由崇（中部大）  
相澤 一美（東京電機大学）

大学英語教育を取り巻く環境が大きく変わりつつある中で、現状に即応しながらも、長期的な視野に立ち、今後の英語教育の在り方を議論する必要がある。「10年後の英語教育を考える」と題したこの特別シンポジウム（1年目）では、特に大学英語教育における教材に焦点をあて、今後の教材の在り方について議論する。大学や学生の多様化、そしてテクノロジーの進化に伴い、教材も大きく様変わりした。リメディアル教材から各専門に特化した教材、資格試験対策用の教材、またスマートフォンやパソコンを活用したe-learning教材など、多種多様な教材が市場に溢れている。こうした市販教材に限らず、教材をより広い観点から捉えるならば、例えばYouTubeなどの動画共有サービスで視聴可能な音楽や動画、ポッドキャスト等で利用可能なラジオ番組、大規模公開オンライン講座（MOOC）の存在なども、今後の教材の在り方を考える上で気になる動向の一つである。一方で、こうした変化の中、教材を活用する側の大学や英語教員に託された課題も多い。質保証と教員の個性を活かす教育の間で揺れる大学の教材採択システム、教員や学生のデジタルリテラシー、そして教材出版社と大学教員の連携の必要性など、教材に関わる諸課題は、教員、学生、そして出版社の多様な観点から常に包括的に議論されなければならない。このような状況に鑑み、本シンポジウムは、大学英語教員と出版社が協働して話題提供を試み、参加者の皆さまとの議論を通して、今後の教材の在り方を展望することを目的とする。具体的には、まず大学英語教育における教材の変遷と現状を確認した後、近年の大学や学生の多様化を受けながら現状の課題を整理し、10年

後の大学英語教材の在り方について議論する。

### 【賛助会員特別シンポジウム3】

#### Enhancement and Assessment of Speaking Skill

##### スピーキング能力の育成と評価

瀧沢 佳宏  
(東京都教育庁指導部)  
奥山 則和  
(学校法人桐蔭学園グローバル教育センター)  
板津 木綿子  
(東京大学)  
塩崎 修健  
(公益財団法人日本英語検定協会)

英語のスピーキング力育成は、長く日本の英語教育の課題であった。初等教育においては外国語活動が導入され、中等教育の学習指導要領においては既に4技能の育成が示され、高等教育においては少人数によるアウトプットスキル育成を念頭においたカリキュラムを組む大学ももはや珍しくない。4技能の中でも入試で問われない最後のスキルとして残っていたスピーキングだが、昨今民間の4技能試験活用による高校入試での加点措置や、2020年度実施の大学入学共通テストにおける4技能測定等が進行し、企業においても英語のアウトプット測定を昇進基準等に課すケースも増えている。そのような流れの中、高校入試において「話すこと」の評価の導入を検討している東京都教育庁、長く民間試験を活用してきた大規模進学校である桐蔭学園、そして教養課程全学生に少人数のスピーキング育成をスタートさせた東京大学より登壇者をお招きし、今一度スピーキング能力の育成と評価について、その意義と課題を考察する。

### 【賛助会員特別シンポジウム4】

#### The Newly Redesigned TOEIC Bridge Tests will enable comprehensive evaluation of four-skills at a basic communication level

##### 基礎的なコミュニケーションレベルでの 4技能評価が可能となる The Newly Redesigned TOEIC Bridge Tests に 関する情報、及び、グローバル人材育成 支援に係る取り組みのご紹介

三橋 峰夫  
(一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会)  
三木 耕介  
(一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会)  
吉田 温子  
(一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会)

2001年より実施しているTOEIC Bridgeテストが2019年中に改訂され、基礎的なコミュニケーションレベルでの4技能評価が可能となります。新しく改訂されるthe Redesigned TOEIC Bridge Testsに関する情報と、2017年度より提供が始まったIIBC Award of Excellenceを始めとする、グローバル人材育成支援に関連するIIBCの様々な取り組みについて紹介します。

### 【賛助会員特別シンポジウム5】

#### Implementing Quality Language Education from Primary to Tertiary Levels, Using a Global Brand Based on the CEFR Scale

##### 小中高大のシームレスな接続を通じた 質保証の実現に向けて：CEFRが 可能にするグローバルブランドの活用

提案者：青山 智恵 (ケンブリッジ大学英語検定機構)  
白鳥 金吾 (北星学園大学短期大学部)  
吉田 努 (北星学園女子中学高等学校)

ケンブリッジ大学英語検定機構が提供する英語資格は、小中高から大学、社会人とすべてのライフステージで英語を学び、そのスキルを世界に証

明するのに役立つ資格です。

ケンブリッジが作問する試験は、言語能力を記述するための国際標準であるCEFRに沿っています。CEFRは部分的にはありますが、ケンブリッジ英語検定をベースに設計されました。2015年、CEFRレベルを数値で表すCambridge Englishスケールが導入され、2018年よりPre A1の初學者レベルからA2レベルの英語力を測るヤングラーナズ英語検定と、ケンブリッジ英語検定の関係が共通のスケールで示されることになり、Pre A1から最高峰のC2まで、小中高大のシームレスな接続が可能になりました。

当特別シンポジウムでは、今年4月に北海道初のCambridge Englishスクールとして、また、中高一貫教育6年間継続して取り組む学校としては日本初となった北星学園女子中学高等学校の、英語力向上のため、ケンブリッジ大学出版の教材やケンブリッジ英語検定をどのように学校の英語教育のカリキュラムに組み込まれているのか等、取り組みについてご紹介します。また、北星学園大学短期大学部英文科では2017年からB1 Preliminaryを教育課程に位置付けて実施し、同年6月に1年生全員が受検しました。外資系ホテルへの就職や海外留学等を希望する学生が増加する中、将来の選択肢を広げ、学生の多様な生き方をサポートするため、世界中の大学や企業から「実際に使える4技能テスト」として高い評価を得ているケンブリッジ英語検定の導入を決定しました。どのように試験結果を学生への指導に役立っているのかなど、ケンブリッジ英語検定の活用のポイントについてお話しします。なお、同英文科は、2017年度実用英語検定協会文部科学大臣賞を受賞し、短大日本一の成績を取めました。ケンブリッジ英語検定を活用して得たスキルは他の試験にも通用する、汎用性の高いスキルを育てる試験であることが証明されたといえるでしょう。

## 【賛助会員特別シンポジウム6】

### The Teaching and Testing of English Speaking at High Schools in Japan

Gordon Allan (British Council)

The Japanese Ministry of Education, Culture, Sport, Science and Technology (MEXT) has announced proposals for performance testing, including speaking, to be introduced to the English component of university entrance exams (UEEs) in 2020. One reason for this change is a perceived need to promote the development of English communication skills. Previous attempts to use high stakes tests to drive educational change in other countries have often met with little or no success. Using tests as drivers of change depends on washback, a complex phenomenon which results from an interaction between the characteristics of a test and the context into which it is introduced. Using Henrichsen's (1989) hybrid model of the diffusion and implementation of change as the basis of a theoretical model, the present study sought both to investigate the antecedent situation in Japan prior to the introduction of the new test(s), and to examine the factors which may help to realise the desired change. Data on Japanese high school English teachers' perspectives were collected, with quantitative data from an online questionnaire analysed alongside qualitative data from interviews with teachers. The findings include that teaching is being taught and tested in high schools despite its absence from UEEs, but this tends to decline in the final year of high school. Teachers' approaches to the teaching and testing of speaking vary in nature and form, with interview data suggesting this often reflects attempts to overcome the practical constraints of testing a large number of students in a limited time. Teachers identify training and information about any new test as top priorities for the support they may need to implement the desired changes in classroom practice.

.....

## 【大学英語教育学会 (JACET) 第58回(2019年度)国際大会】

大学英語教育学会 (JACET)  
第58回国際大会 (名古屋、2019)  
The 58<sup>th</sup> JACET International  
Convention (Nagoya, 2019)

開催期間：2019年8月28日 (水)・29日 (木)・  
30日 (金)

開催校：名古屋工業大学

住所：〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区御  
器所町

大会テーマ：「ボーダーレス」の先に一変革する  
社会における英語教育  
Beyond 'Borderless': English  
Education in a Changing Society

基調講演者：

1. 田地野 彰 (名古屋外国語大学・京都大学名誉  
教授)
2. Angel Lin (香港大学)

大会主旨：

「ほんの小さい鍵が重い扉を開けることだってあるのだ」(C. ディケンズ 小池・石塚訳『ディケンズ短編集』)

社会の変革とともに発生する力学は教育全般に影響を与える。社会の変化はとりわけ言語教育に大きな影響を及ぼしてきた。経済発展の必然から始まったグローバル化は、現在の世界の常態となり、テクノロジーが急進する世界において、従来の枠組みを決定していた境界線は様々な場面で融解しているように見える。国境を越えた文化の滲出や、学問分野における学際的研究の進展はあらゆる面で「ボーダー」を曖昧にする。そのような世界にあって、英語教育に求められる流動性や柔軟性はどのように捉えられるべきだろうか。伝統と技術革新のせめぎあいから引き起こされる緊張や、学問分野における理論と実践、アカデミズムと現実社会の往来に英語教育はその方向性をどこに見出していくのか。

大学英語教育学会 (JACET) 第58回国際大会 (名古屋、2019) は、このような境界の曖昧性が進んだ結果生まれつつある「ボーダーレス」社会の

先を見据えた英語教育について考える機会を提供し、目指すべき方向性やその意義について研究者や実践者のためのフォーラムの場としたい。AIロボットが人間とコミュニケーションするようになり、近未来において、生身の英語教員の意義や役割は何なのか、教室でのテクノロジーの関わりや、コミュニケーションそのものの変容はあるのか。「ボーダーレス」の先にある 'trans' paradigmatic な世界の中における英語教育は、その小さな部分かもしれない。しかし「ほんの小さい鍵が重い扉を開けることだってある」のである。

'A very little key will open a very heavy door'  
(Charles Dickens, 1812-1870)

It is imminent that societal forces in one way or another have an impact on language education in general. In our contemporary society characterized by globalization and technology, there is an increasing movement among the various disciplines, nations, and cultures to transcend borders or boundaries. Under such circumstances, how can we accommodate and understand the fluidity and flexibility required to embrace diversity? How do we account for the tension created as we move from traditions and innovations, theory and practice, and even the academic sphere and business world?

The 58th JACET International Convention (Nagoya, 2019) will provide stimulating forum for researchers and practitioners to collectively rethink the directions and significance of current English language education in a world where the implications of borders and boundaries are controversial. For instance, in an era where AI robots are capable of human-like communication, what will be the role of human teachers? What are the issues and challenges in incorporating technology into our classrooms? Will there be changes in our communicative practices and interactions? The objective of the conference is to gather together to develop and share broad perspectives on English education in order to achieve the educational goals sought in this 'trans' paradigmatic world. The heavy door of the future awaits.

# 第1回ジョイントセミナー (京都、2018)

## —第45回サマーセミナー &第6回英語教育セミナーを 振り返って—

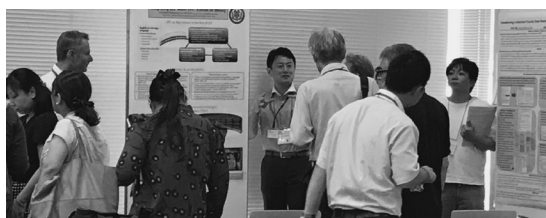
担当理事 浅川 和也  
小田 眞幸  
田地野 彰

第45回サマーセミナーと第6回英語教育セミナーを統合したJACET第1回ジョイントセミナーが、8月20日(月)から8月22日(水)までの3日間、京都府立大学にて開催されました。“Classroom research revisited: Who are the ‘practitioners?’”(授業学を問い直す—だれが‘practitioners’か)というテーマのもと、諸外国の教育研究機関に在籍していらっしゃる方々も含め、日本各地から約140名もの方々がご参加くださいました。講師として、英国リーズ大学からJudith Hanks先生、京都大学からTim Stewart先生、広島大学から柳瀬陽介先生、兵庫教育大学から吉田達弘先生、関西大学から竹内理先生をお招きしました。先生方の熱のこもったご講義に参加者は引き込まれるとともに、新しい授業研究に関する最新の成果を中心に、良いリサーチとはどのようなものなのか、実践者とは誰なのか、など本質的な問いが講師の先生方から投げかけられ、参加者同士での話し合いも通じて、授業に関して省察的に見直す機会が提供されました。



JACETアーカイブのポスター展示に加えて、講義の合間に12件のポスター発表が行われました。講師の先生方からすべてのポスター発表に対してコメントがあり、参加者も含め活発なやり取りが行われました。

賛助会員(10社)による教材展示やポスター展示、さらにプレゼンテーションなどもあり、大変な賑わいでした。



最終日には、「授業学」をテーマとして行ってきた3年間の活動の総括として、JACET授業学研究会(関東、中部、関西)による合同シンポジウムが行われました。岡田伸夫先生の司会のもと、馬場千秋先生(関東)、佐藤雄大先生(中部)、村上裕美先生(関西)がパネリストとして登壇され、それぞれの活動内容や授業学の諸課題について熱い議論が交わされました。

また、京都府立大学学生食堂「Deli Cafe たまご」で開催された懇親会では、和やかな雰囲気の中で参加者の方々が交流を深めていました。京都大学の吉田亞矢先生が、愛の讃歌やTime to Say Goodbyeなどの名曲を熱唱され、楽しいひと時に





彩りを添えてくださいました。

第1回ジョイントセミナーを盛況のうちに終わることができたのは、ひとえにセミナーに関わってくださった多くの方々の協働・協力なしにはありえませんでした。会長の寺内一先生、事務局長の保坂佳代子氏、委員長の桂山康司先生をはじめ、セミナー事業委員会の先生方、とりわけ会場校の山口美知代先生、Larry Walker先生、細越響子先生に感謝申し上げたいと思います。

本セミナーをとおして、Exploratory Practiceが日本においてもさらに浸透し、英語教育、ひいては学生と教員のQuality of Lifeが向上していくことを願っております。

来年は東京の玉川大学にて第2回ジョイントセミナーが開催される予定です。「教材開発」について学び合いの場を提供できれば幸いです。学びと乾杯のひと時を皆さまと一緒できますことを楽しみにしております。

## 2018年度 JACET 賞

2018年度のJACET賞については、厳正なる審査の結果、論文部門と新人発表部門で授与が決定しました。

第57回（2018年度）国際大会の会期中に、上記2部門の表彰式が行われました。各賞の受賞者と対象業績は以下のとおりです。受賞者の方には心よりお喜び申し上げます。

### 大学英語教育学会賞論文部門

受賞者：松田紀子（藍野大学）

対象業績：論文“Evidence of the effects of text-to-speech synthetic speech to improve second language learning” (JACET Journal No.61 (2017), pp. 149-164)

### 大学英語教育学会賞新人発表部門

受賞者：Wang, Wei Tung（明治大学大学院生）

対象業績：研究発表“Vocabulary Acquisition from Elementary School to Senior High School in Japan and Taiwan”(大学英語教育学会（JACET）第57回国際大会（仙台、2018）2018年8月28日発表）

（JACET賞運営委員会）

## 2018年度 JACET 名誉会長賞

大学英語教育学会では、第55回（2016年度）国際大会より一般ポスターセッションで発表された対象者の中から、最も優れた発表に対して名誉会長賞を授与することとなりました。2018年度は、第57回（2018年度）国際大会において、1件の名誉会長賞が授与されました。受賞者と対象となった業績は以下の通りです。受賞者の方には心よりお喜び申し上げます。

### 大学英語教育学会名誉会長賞

受賞者：北川 彩（慶応義塾高等学校）

発表タイトル：Investigation of the Learning Process of English Wh-question Intonation: Japanese Learners

## 本部だより

代表幹事 下山幸成(東洋学園大学)

今年度の国際大会も多くの会員の皆さまにご参加いただき、ありがとうございました。東北支部で開催された大会としては過去最高の参加者数でした。また、本部及び東北支部の国際大会組織委員会の皆さまのご尽力にも心よりお礼申し上げます。

さて、本部からは6月17日に行われました定時社員総会の議事録、8月29日に行われました会員総会の議事録、平成29(2017)年度の事業状況報告書、収支計算書、財産目録、監事監査報告書をお知らせいたします。

### 一般社団法人 大学英語教育学会 平成30(2018)年度定時社員総会議事録

日 時：平成30(2018)年6月17日(日)

13時30分～14時30分

会議場：公益財団法人日本英語検定協会大会議室B  
(東京都新宿区横寺町55)

総社員数：83名

出席社員数：73名

内訳 本人出席 19名(出席者名簿別添)

委任状出席 54名(委任状出席者名簿別添)

よって『定款』第18条および第20条の規定の定足数以上を充足

(\*第18条および第20条による過半数は42名)

陪席者：7名(陪席者名簿別添)

議 長：上田倫史

議事録署名人：尾関直子、田地野彰

議事録作成者：下山幸成

#### I. 開会

河野円総務担当理事より、定款所定の定足数を満たした旨の報告があり、社員総会の開会が宣言された。

#### II. 会長挨拶

寺内一会長より、重要な案件があり慎重に審議をお願いしたいとの挨拶があった。

#### III. 議長選出

河野円総務担当理事が議長の選出について諮ったところ、議長に上田倫史氏が選出された。

#### IV. 議事録署名人選出

議長が議案審議に先立ち、議長の他の議事録署名人2名について、尾関直子氏と田地野彰氏の兩名を指名したい旨を述べたところ、異議なく可決された。

#### V. 審議案件

第1号議案 会員異動状況報告の件

河野円総務担当理事より、平成30(2018)年度会員異動状況について報告があり、可決された。

第2号議案 平成29(2017)年度事業報告・収支決算の件

1. 平成29(2017)年度事業報告

河野円総務担当理事より、平成29(2017)年度事業報告の説明があり、下記1～6号事業がすべて可決された。

(1) 1号事業 大学英語教育及び言語教育関連の研究理論の発表及びその実践結果の報告のための大会、セミナー等の開催

(2) 2号事業 紀要、学会誌等の出版物の刊行

(3) 3号事業 大学英語教育に係る国内外の研究者・学術団体・諸機関の実践活動に対する表彰

(4) 4号事業 大学英語教育に係る国内外の研究者・学術団体・諸機関との協力

(5) 5号事業 大学英語教育及び言語教育関連の理論及びその実践方法に関する調査・研究

(6) 6号事業 その他のこの法人の目的を達成するために必要な事業

2. 平成29(2017)年度決算

浅川和也財務担当理事より、平成29(2017)年度の決算報告があり、可決された。

3. 監事監査報告

笹島茂監事より、平成29(2017)年度の事業監査および会計監査に関して、適正であった旨報告があり、可決された。

第3号議案 『定款』改正の件

定款に関する以下の案が審議の結果承認され、

平成31年4月1日より改正される。

## 1. 会員に関する変更

(法人の構成員)

### 第6条 三 賛助会員

改正前 この法人の目的に賛同して事業を援助するために、次条の規定により入会した企業。

改正後 この法人の目的に賛同して事業を援助するために、次条の規定により入会した法人。

## 2. 役員に関する変更

(役員の設置)

### 第23条 一

改正前 理事のうち1名を会長、2名以内を副会長とする。

改正後 理事のうち1名を会長、3名以内を副会長とし、副会長の1名は総務担当理事か財務担当理事が兼任する。

## 第4号議案 『会員規程』改正の件

会員規程に関する以下の案が審議の結果承認され、平成31年4月1日より改正される。

### 1. 役員に関する変更

(会員の特典)

### 第10条 (7)

改正前 一般（一般）会員は本学会が常設する運営委員会、若しくは臨時に設置する特別委員会の委員に就任することができる。

改正後 一般（一般）および一般（維持）および一般（終身維持）会員は本学会が常設する運営委員会、若しくは臨時に設置する特別委員会の委員に就任することができる。

## VI. 報告

### 1. 平成30（2018）年度事業計画および収支予算

河野円総務担当理事より、平成30（2018）年度の事業計画および人事について説明があった。また、浅川和也財務担当理事より、事業計画に基づいた収支予算について説明があった。

### 2. 現行規程等報告

河野円総務担当理事より、平成29（2017）年度中に改正が行われた規程、ガイドライン等について報告があった。

## VII. 閉会

以上をもって一般社団法人大学英語教育学会定時社員総会の議事を終了したので、議長は閉会を宣した。

以上

## 2018年度 一般社団法人大学英語教育学会 会員総会議事録

日 時：2018年8月29日(水)

13時15分～13時45分

場 所：東北学院大学 土樋キャンパス ホーイ記念館 多目的ホール

司 会：下山幸成（代表幹事）

書 記：馬場千秋（副代表幹事）

出席会員数：22名

次 第：

### I. 開会宣言

司会の下山幸成代表幹事より、会員総会の開会が宣言された。

### II. 会長挨拶

寺内一会長より、活動報告等をさせていただく旨の挨拶があった。

### III. 報告事項

#### 1. 総務関係

河野円総務担当理事より、資料に基づき、2018年度会員状況報告（1頁）、JACET創立以来の会員数（2頁）、2017年度活動報告（3-9頁）、2018年度活動計画（10-14頁）、『定款』および『会員規程』改正の件（15-17頁）に関する説明があった。

また、2017年3月31日に、「感謝状贈呈ガイドライン」により、JACETに貢献された以下の方に感謝状が送付されたとの報告があった。（敬称略）

高井収

2008年4月1日～2012年3月31日（理事）

2010年4月1日～2012年3月31日（北海道支部長）

計1名

#### 2. 財務関係

浅川和也財務担当理事より、資料に基づき、2017年度決算報告（18-29頁）、2018年度予算（31-35頁）に関する報告があった。また、業務

ならびに会計が適正に運営されている旨、監査報告（30頁）があった。

### 3. 2018年度人事

河野円総務担当理事より、資料に基づき、2018年度人事（36頁-39頁）に関する説明があった。

### 4. 各委員会よりご案内

#### ・国際大会組織委員会

志水俊広国際大会担当理事より、現在開催されている2018年度国際大会の報告があった。また、2019年度は名古屋工業大学で、2020年度は関西で開催することが報告された。なお、2020年度は東京五輪が開催されるため、国際大会の開催時期等を検討する予定であるとの報告があった。

#### ・『JACET通信』委員会

佐藤雄大『JACET通信』委員会担当理事JACET通信第203号を12月に紙媒体で発行することが報告された。

#### ・学術出版委員会

富田かおる学術出版委員会紀要担当理事より、紀要第63号の進捗状況について報告があった。また、サマーセミナー講師へのinvited papersの依頼、提携学会からのreviewerについて報告があった。

河野円学術出版委員会SP担当理事より、『Selected papers』第5号の発行と第6号の投稿について報告があった。

#### ・セミナー事業委員会

浅川和也セミナー事業委員会担当理事より、2018年度第1回ジョイントセミナー（2018年8月20日～22日 於：京都府立大学）の報告があった。

田地野彰セミナー事業委員会担当理事より、2019年度第2回ジョイントセミナー（8月20日～22日 於：玉川大学）の案内があった。テーマは教材開発とし、このテーマで3年間のセミナーを企画する予定であることが報告された。

#### ・研究促進委員会

田地野彰研究促進委員会担当理事よりJAAL-in JACET学術交流集会を2018年12月1日に高千穂

大学にて開催し、プロシーディングスを発行予定であることが報告された。

#### ・学術交流委員会

小田眞幸学術交流委員会担当理事より、現在開催中の2018年度国際大会でのAILA East ASIA シンポジウム開催および提携学会との提携更新についての報告があった。

#### ・大学英語教育学会賞運営委員会

石川慎一郎大学英語教育学会賞運営委員会担当理事より、大学英語教育学会賞の規定見直しを行っていることおよび今年度の授賞式が2018年8月29日 17時より開催されることが報告された。

## IV. 閉会

以上をもって、一般社団法人大学英語教育学会会員総会の議事を終了したので、司会は閉会を宣言した。

以上

---

## 一般社団法人大学英語教育学会 平成29（2017）年度事業状況報告書

定款第5条第1項の（1）から（6）に掲げる平成29年度の事業計画実施概要の報告は下記の通りです。

### 記

#### 1号事業報告：大会セミナー等事業

(1) JACET第56回国際大会（2017年度、東京）の開催

平成29年8月29日から31日まで青山学院大学（東京都渋谷区）において、「グローバル化が進む世界における英語—世界共通語の教育と研究における現状と課題を探る」をテーマにJACET第56回国際大会（2017年度、東京）を開催した。1,000人の参加者があった。本大会では、基調講演2件（うち1件がState of the Artシリーズ）、海外提携学会代表による招待講演8件、全体シンポジウム2件、会長講演1件、名誉会長講演1件をはじめ、関東支部企画として特別講演1件、支部企画シンポジウム1件、支部企画青山アワーの特別ワークショップ3件が行われた。その他、特

別委員会報告2件、賛助会員特別シンポジウム3件、研究会ポスターセッション28件、Doctoral Thesisポスターセッション5件、支部企画グローバルポスターセッション5件、JAAL-in-JACETポスターセッション2件、外部試験テストポスターセッション13件も行われ、多岐に渡る内容となった。また、一般募集の発表としては、研究発表70件（うちJACET賞新人発表枠6件）、実践報告39件、シンポジウム14件、ワークショップ10件、賛助会員発表9件、ポスターセッション13件が行われた。

本大会の全体報告および基調講演、招待講演、全体シンポジウム、支部企画、特別ワークショップ、賛助会員特別シンポジウム、特別委員会報告は、12月に刊行した『JACET通信200号』に掲載し、学会ウェブサイトで会員に周知した。また、後援名義許可をいただいた文部科学省、東京都教育委員会、共催をいただいた青山学院大学への報告も行った。

#### (2) JACET第44回サマーセミナー（2017年度、東京）の開催

平成29年8月26日と27日に早稲田大学早稲田キャンパスにおいてJACET第44回サマーセミナー（2017年度、東京）を行った。“English as a Lingua Franca (ELF) in the globalized world: Research and implications for practice（グローバル社会における国際語としての英語—研究と実践的応用）”のテーマのもと、ウィーン大学からHenry Widdowson先生とBarbara Seidlhofer先生、早稲田大学から村田久美子先生を講師として招き、2日間の研修を行い、当該テーマについての理解を深めた。また、参加者によるポスター発表も行われ、セミナー中は活発な意見交換や情報交換が行われた。参加者は120人であった。講師による研究成果についてはInvited Paperとして『JACET Journal』の次号に掲載予定である。

#### (3) JACET第5回英語教育セミナー（2017年度、大阪）の開催

平成29年11月4日に関西外国語大学中宮キャンパスICCセンターにおいて、JACET第5回英語教育セミナー（2017年度、大阪）が「授業学を生かす英語教育イノベーション」というテーマのもとに開催された。関東・中部・関西の各授業学

研究会を中心に、「授業学」について3年間の見直しをもって成果を持ち寄り、研究活動の活性化をはかることをねらいとするもので、今回はその2年目であった。基調講演、関東・中部・関西の授業学研究会の分科会、モバイルラーニングをテーマとする分科会、賛助会員9社による展示およびプレゼンテーションが行われ、100名が参加した。会員には『JACET通信』を通じて案内し、一般向けには案内を学会ウェブサイトに掲載するほか、月刊『英語教育』、『英語青年（ウェブサイト版）』誌に掲載した。セミナーの内容は報告書にまとめる予定である。なお、本セミナーは、公益財団法人日本英語検定協会による「平成29年度実用英語の習得及び普及向上のための助成事業」としての助成も得た。

#### (4) 支部大会の開催

以下のように、各支部において支部大会が開催された。披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動に大きな道標となった。大会内容については、各支部ニューズレターで報告された。

- ・北海道支部大会 平成29年7月1日
- ・東北支部大会 平成29年7月1日
- ・中部支部大会 平成29年6月3日
- ・関西支部大会 平成29年6月17日、11月25日
- ・中国・四国支部大会 平成29年6月3日、10月21日
- ・九州・沖縄支部大会 平成29年7月8日

#### (5) 支部講演会の開催

以下のように、各支部において講演会が開催された。披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動の大きな道標となった。

- ・関東支部講演会 平成29年4月8日、9月9日、10月14日、12月9日、平成30年1月20日
- ・中部支部講演会 平成29年12月9日
- ・関西支部講演会 平成29年7月8日、10月14日、平成30年3月10日
- ・九州・沖縄支部講演会 平成29年7月8日、11月25日

#### (6) 支部研究会等の開催

以下のように、各支部において研究会等が開催

された。披露された研究成果や知見が各研究者の研究活動の大きな道標となった。

- ・北海道支部研究会  
平成29年11月19日、平成30年3月11日
- ・東北支部例会  
平成29年11月26日
- ・関東支部月例研究会  
平成29年5月13日、6月10日、11月11日
- ・中部支部研究会  
平成29年10月21日、平成30年3月3日
- ・中国・四国支部地区大学間連携イベント  
Oral Presentation & Performance (OPP) 研究会  
平成29年12月17日

## 2号事業報告：出版物刊行事業

### (1) 『紀要』の刊行

平成30年2月22日に『JACET Journal』62号を刊行した。会員より応募された論文、リサーチ・ノート、及びブックレビューの3つの分野における論文を厳正に審査し、掲載、非掲載を決定した。会員及び英語教育関係機関（国立国会図書館、大学基準協会、コンピュータ利用協議会、全国語学教育協会、海外提携学会等）へ送付し、日本の英語教育研究の最新情報を発信した。

### (2) 『Selected Papers』の発行

平成29年8月に『JACET International Convention Selected Papers』4号を発行した。国際大会で口頭発表（一般ポスター発表も含む）した発表者の学術研究を奨励し、論文発表の機会を与えるため、また海外の学会や英語教育関係者に日本の研究をリアルタイムで発信するため、電子ジャーナル（オンライン）として発行した。

### (3) 『JACET通信』の刊行

- ①平成29年12月1日に『JACET通信』200号  
（日本語、印刷版およびウェブ版）
- ②平成30年3月13日に『JACET通信』201号  
（英語、ウェブ版）

通信を2回刊行し、大学英語教育関連の情報発信に寄与した。学会の最近の動向や大学英語教育に関する優れた研究等を紹介することにより、会員の大学英語教員としての意識を向上させることができた。また、①は200号という節目の号であったため、「『JACET通信』の歴史を振り返る」と題

する特別企画記事を掲載し、学会活動の歴史の確認・継承に資するものとなった。

### (4) 支部紀要の発行

各支部で紀要を発行し、会員及び英語教育関係者等へ送付した。支部紀要は、支部会員の学術研究を奨励し、論文発表の機会を与えた。また、日本の英語教育研究の最新情報を発信した。

- ・『北海道支部紀要』14号 平成30年3月16日
- ・『TOHOKU TEFL』7号 平成30年3月31日
- ・『関東支部紀要』5号 平成30年3月31日
- ・『中部支部紀要』15号 平成29年12月20日
- ・『JACET Kansai Journal』20号  
平成30年3月31日
- ・『大学英語教育学会中国・四国支部紀要』15号  
平成30年3月31日
- ・『Annual Review of English Learning and Teaching』22号 平成29年11月30日

### (5) 支部ニューズレターの発行

各支部でニューズレターを発行し、支部活動動向や、支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行った。

- ・『JACET北海道支部ニューズレター』31号  
平成30年3月31日
- ・『JACET東北支部通信』44号  
平成30年3月31日
- ・『JACET関東支部ニューズレター』9, 10号  
平成29年10月30日、平成30年3月31日
- ・『JACET Chubu Newsletter』38, 39号  
平成29年5月10日、平成30年1月20日
- ・『JACET Kansai Newsletter』77, 78, 79号  
平成29年5月20日、7月31日、11月1日
- ・『大学英語教育学会中国・四国支部ニューズレター』19, 20号  
平成29年7月30日、平成30年1月10日
- ・『九州・沖縄支部ニューズレター』33号  
平成29年4月15日

## 3号事業報告：表彰事業

### (1) 大学英語教育学会賞の表彰

第56回（2017年度）国際大会の初日（平成29年8月29日）と最終日（平成29年8月31日）に、英語教育における研究または実践上の顕著な業績を通してわが国における大学英語教育の改善

と進歩・発展に寄与した本学会員である個人または団体に対して表彰を行なった。受賞者に対しては賞状とともに記念品を贈呈した。

平成29(2017)年度大学英語教育学会賞

・学術出版部門

受賞者：村田久美子(早稲田大学)、矢野安剛(早稲田大学)、寺内一(高千穂大学)、荒木瑞夫(宮崎大学)、飯野公一(早稲田大学)、小中原麻友(神田外語大学)、土屋慶子(横浜市立大学)、Henry Widdowson (University of Vienna)

対象業績：『Exploring ELF in Japanese Academic and Business Context: Conceptualisation, research and pedagogic implications』(Routledge, U.K. 2016)

・新人発表部門：

受賞者：Newbery-Payton, Laurence (東京外国語大学大学院生)

対象業績：研究発表“Preposition Errors by Japanese Learners of English: A Learner Corpus Based Analysis”(大学英語教育学会第56回国際大会(2017年度、東京)平成29(2017)年8月30日発表)

その他の部門に関して、今年度は該当者がなかった。

#### 4号事業報告：協力事業

(1) 関係学術団体への派遣Ⅰ(海外提携学会)

① KATE (The Korea Association of Teachers of English)

平成29年6月30日から7月1日に大韓民国で開催されたKATE 2017 International Conferenceに本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。

② AILA (Association Internationale de Linguistique Appliquée) EIBC

AILA(国際応用言語学会)リオデジャネイロ大会(平成29年7月23日から28日)の前に行われたEBIC business meeting(平成29年7月21日、22日)に、AILA担当でAILA EBICメンバーでもある委員を派遣し、平成32(2020)年のGroningen大会の準備状況、AILA会員登録、平成35(2023)年大会等について報告・協議が行われた。

③ ALAK (The Applied Linguistics Association of Korea)

平成29年9月9日に大韓民国で開催されたALAK 2017 International Conferenceに本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。

④ MELTA (Malaysian English Language Teaching Association)

JACET国際大会と会期が重なったため平成29年度の派遣はなし。

⑤ PKETA (Pan-Korea English Teachers Association)

平成29年9月23日に大韓民国で開催されたPKETA 2017に本学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。

⑥ CELEA (Chinese English Language Education Association)

平成29年10月20日から22日にXi'anで開催されたThe 8th International Conference on English Language Teaching (ELT)に本学会代表者2名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。

⑦ ETA-ROC (English Teachers' Association of Republic of China)

平成29年11月11日から13日に台湾で開催されたThe 26th International Symposium and Book Fair on English Teachingに本学会より学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。

⑧ Thai TESOL (Thailand TESOL)

平成30年1月26日、27日にタイ王国で開催されたThe 38th Annual ThaiTESOL International Conferenceに本学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。

⑨ RELC (Regional Language Centre)

平成30年3月12日から14日にシンガポール共和国で開催された53rd RELC International Seminarに本学会代表者1名を派遣し、研究発表のほか、提携学会関係者との意見交換を行った。

(2) 関係学術団体への派遣Ⅱ(国内提携学会)

① JALT (The Japan Association for Language Teaching)

平成29年11月17日から20日に茨城県で開催された2017年JALT年次大会に本学会代表者1名を派遣し、提携学会関係者との意見交換を行った。

### (3) 提携学会からの代表者受け入れ

#### ① JACET国際大会でのReception開催

平成29年8月29日に開催された第56回(2017年度)国際大会学術交流レセプションに提携学会からの代表者を招待し、親睦を深めるとともに情報交換を行った。

#### ② JACET国際大会での招聘発表の実施

平成29年8月29日から31日に開催された第56回(2017年度)国際大会に、国外・国内提携学会からの代表者を招聘し、学術交流、協力活動に関する事業を計画し、招待講演に関わる手配、アテンドなどを行うことで友好的な関係を促進した。

## 5号事業報告：調査研究事業

### (1) 実態調査

大学英語教育の実態調査を行うために10回の会議を開催した。大学で英語を教える教員を対象に質問紙調査を実施し、全国の英語教員853名から回答を得た。この結果、英語教育は10年前と比べて、雇用形態、雇用状態、教育環境など、大きく変化していることがわかった。

### (2) 専門分野別の研究会活動

48の研究会がそれぞれの分野での調査研究を基盤として、会員の資質向上、書籍出版、教材開発、紀要等での論文発表などの活動を行った。それにより、大学英語教育の発展に寄与し、会員相互の専門知識と技能の向上、会員の知見による学術の発展及び社会への還元を行った。また、各研究会の研究成果物を可能な限り公開できるように、そのための整理を行った。

## 6号事業報告：その他 法人事業

### (1) 理事会の開催

平成29年5月21日、平成29年6月18日午前、平成29年6月18日社員総会后、平成29年8月28日、平成29年12月24日、平成30年3月18日の計6回、理事会を行った。

### (2) 社員総会の開催

平成29年6月18日に平成29年度定例社員総会を行い、平成28年度決算、平成29年度人事、諸規程の承認等を行った。内容はウェブサイトお

よび『JACET通信』で報告した。

### (3) その他の委員会の開催

定例の各運営委員会、運営会議、顧問会議、支部委員会、支部役員会を適宜行った。

### (4) 会員総会の開催

平成29年8月30日に会員総会を行った。平成28年度事業報告および平成29年度活動状況の報告を会員に行った。出席しなかった会員へは『JACET通信』で内容を報告し、事業活動を会員へ周知した。

### (5) 『会員名簿』の刊行

会員情報の提供、定款等規則の開示を目的として『一般社団法人大学英語教育学会(JACET)会員名簿』を平成29年12月1日に発行した。

### (6) 公益目的支出計画最終報告書の提出

平成28年度決算に基づいて報告書を提出し、4年間の公益目的支出計画を全て終了した最終報告を内閣府に提出した。

### (7) 支部総会の開催

各支部において、支部総会を開催した。

- ・北海道支部総会 平成29年7月1日
- ・東北支部総会 平成29年7月1日
- ・関東支部総会 平成29年6月10日、11月11日
- ・中部支部総会 平成29年6月3日、12月9日
- ・関西支部総会 平成29年11月25日
- ・中国・四国支部総会 平成29年6月3日
- ・九州・沖縄支部総会 平成29年7月8日

### (8) 委託研究の実施

公益財団法人日本英語検定協会から申し出のあった委託研究を行った。委託研究課題名は「大学英語教育の質保証に向けたEAPカリキュラム実態把握のための調査研究一本調査」。本調査研究の最終年度である平成29年度は、平成28年度までに収集したデータのさらなる分析と研究の総括を行った。

以上



一般社団法人 大学英語教育学会  
平成29年度収支計算書

(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)

(単位：円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
①基本財産運用収入			
基本財産利息収入	10,000	7,114	2,886
②入会金収入			
入会金収入	250,000	224,000	26,000
③会費収入			
一般会員会費収入	20,700,000	20,209,000	491,000
学生会員会費収入	750,000	553,000	197,000
維持会員会費収入	195,000	156,000	39,000
賛助会員会費収入	2,100,000	1,950,000	150,000
団体会員会費収入	600,000	560,000	40,000
会費収入計	24,345,000	23,428,000	917,000
④事業収入			
展示・広告収入	2,799,500	3,170,000	△ 370,500
参加費収入	9,886,500	8,494,500	1,392,000
書籍販売収入	2,050,000	1,533,169	516,831
雑収入	1,530,000	1,472,000	58,000
事業収入計	16,266,000	14,669,669	1,596,331
⑤寄付金収入			
寄付金収入	1,000,000	250,000	750,000
⑥雑収入			
受取利息収入	1,000	64	936
広告収入	400,000	210,000	190,000
雑収入	990,000	1,000,000	△ 10,000
雑収入計	1,391,000	1,210,064	180,936
事業活動収入計	43,262,000	39,788,847	3,473,153
2. 事業活動支出			
①事業費支出			
印刷製本支出	5,984,500	4,842,072	1,142,428
給料手当支出	3,654,893	3,708,782	△ 53,889
臨時雇賃金支出	1,413,200	1,376,600	36,600
賞与支出	638,579	638,579	0
旅費交通費支出	5,384,569	4,838,022	546,547
通信運搬費支出	1,802,320	1,864,805	△ 62,485
消耗什器備品費支出	1,225,026	1,245,782	△ 20,756
会議費支出	4,710,000	5,137,181	△ 427,181
諸謝金支出	775,685	799,055	△ 23,370
負担金支出	180,000	172,710	7,290
図書研究費支出	1,015,000	971,177	43,823
事業費支出計	26,783,772	25,594,765	1,189,007
②管理費支出			
給料手当支出	3,209,560	3,805,035	△ 595,475
賞与支出	571,339	536,339	35,000
臨時雇賃金	10,000	6,175	3,825
退職給付支出	0	278,000	△ 278,000
法定福利費支出	1,000,000	962,170	37,830
会議費支出	304,540	245,066	59,474
旅費交通費支出	3,782,060	3,685,865	96,195
通信運搬費支出	1,308,380	1,369,813	△ 61,433
消耗什器備品費支出	564,680	314,730	249,950
修繕費支出	5,000	0	5,000
印刷製本費支出	963,000	824,538	138,462
支払手数料支出	1,430,000	1,412,140	17,860
光熱水料費支出	150,000	135,849	14,151
賃借料支出	2,495,560	2,490,048	5,512
諸謝金支出	100,000	118,036	△ 18,036
租税公課支出	15,000	200	14,800
負担金支出	60,000	60,000	0
図書研究費支出	30,000	6,780	23,220
雑支出	167,800	130,479	37,321
管理費支出計	16,166,919	16,381,263	△ 214,344
③その他の支出			
法人税、住民税及び事業税	100,000	70,000	30,000
事業活動支出計	43,050,691	42,046,028	1,004,663
事業活動収支差額	211,309	△ 2,257,181	2,468,490
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入			
①固定資産売却収入			
什器備品除却調整	0	1	
投資活動収入計	0	1	
2. 投資活動支出			
①その他の支出			
退職積立金支出	192,000	0	192,000
投資活動支出計	192,000	0	192,000
投資活動収支差額	△ 192,000	1	△ 192,001
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
財務活動収入計	0	0	0
2. 財務活動支出			
財務活動支出計	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV 予備費支出			
予備費支出	0	-	0
当期収支差額	19,309	△ 2,257,180	2,276,489
前期繰越収支差額	0	5,802,218	△ 5,802,218
次期繰越収支差額	19,309	3,545,038	△ 3,525,729

# 財 産 目 録

平成 30年 3月 31日 現在

(単位：円)

貸 借 対 照 表 科 目		場 所 ・ 物 量 等	使 用 目 的 等	金 額
(流動資産)	現金			330,634
	普通預金			3,319,474
	定期預金			361,016
	未収金			60,600
	たな卸資産			1,125,705
流動資産合計				5,197,429
(固定資産)	基本財産			
	定期預金			20,000,000
	その他固定資産			
	什器備品			1
	敷金			963,900
固定資産合計				20,963,901
資産合計				26,161,330
(流動負債)	未払費用			313,200
	未払法人税等			70,000
	預り金			143,486
流動負債合計				526,686
固定負債合計				0
負債合計				526,686
正味財産				25,634,644

## 監事監査報告書

一般社団法人 大学英語教育学会

会長(代表理事) 寺内 一 殿

私ども監事は、一般社団法人大学英語教育学会の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの業務について監査を実施しました。その結果について、次のとおり報告いたします。

### 1. 監査の概要

各監事は理事会に出席するほか、理事および法人の関係者から事業の執行状況について聴取し、業務について監査を実施しました。

また、当該事業年度に係る貸借対照表ならび正味財産増減計算書、およびその附属明細書について監査を実施しました。

### 2. 監査の結果

#### (1) 業務監査の結果

法人の業務について、法令、定款および規則等に従い、適正に運営されているものと認めます。


#### (2) 会計監査の結果

貸借対照表ならび正味財産増減計算書、およびその附属明細書は、法人の財産および損益の状況を正しく示しているものと認めます。

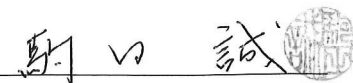

平成30年5月14日

一般社団法人 大学英語教育学会

監事

監事

# 支部だより

## 〈九州・沖縄支部〉

### 1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

#### (1) 支部研究大会

##### ①第30回支部研究大会

日時：2018年7月7日（土）9:30～17:40

場所：九州産業大学

大会テーマ：「Student Engagementによる英語学習成果向上への取り組み—英語学習者の主体的学びへの関与をいかに高めるか—」“Improving EFL Learning Outcomes through Student Engagement”

※本大会は台風の接近に伴い、開催を取りやめた。

#### (2)2018年度特別研究会・支部総会・特別学術講演会

日時：2018年10月13日（土）9:30～16:50

場所：九州産業大学

演題：大学教育の質的転換と学生エンゲージメント—主体的な学びをいかに実現するか—

講師：山田剛史（京都大学）

※本研究会・特別学術講演会は、第30回支部研究大会の代替のために設けられたものであり、本講演は、本来前述の研究大会のために準備されていたものである。

#### (3) 研究会

##### ①第187回東アジア英語教育研究会

日時：2018年6月23日（土）15:30～17:35

場所：西南学院大学

研究発表

1) 「音素認識教育の重要性：脳科学の研究から小学校英語学習への提言」中野秀子（九州工業大）

2) 「韓国の中学校英語教科書の構成に関する研究」清永克己（日新館中）

##### ②第188回東アジア英語教育研究会

日時：2018年7月28日（土）15:30～17:35

場所：西南学院大学

研究発表

1) 「コーパスを用いた新しいEAP語彙リストの開

発：BABILONプロジェクトの背景と狙い」石川慎一郎（神戸大）

2) 「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のブログデータをを用いた内容ジャンル別オノマトペ使用状況分析：コアオノマトペの抽出に向けて」王思閣（神戸大・院）

3) 「ジェンダーの観点から見た東アジアの英語教科書について—男女の役割に注目して—」日本の教科書編 石川有香（名古屋工業大）、台湾の教科書編 相川真佐夫（京都外国語大）

##### ③第27回ESP研究会

日時：2018年7月21日（土）14:00～17:40

場所：熊本大学

研究発表

1) “Can Students Independently Apply Cultural Information in Their Professional Area?: Analysis of Student Outcomes in an ESP Course” 川北直子、Joel Hensley（宮崎県立看護大）

2) 「農学semi-popularization記事における語彙の特徴」山本佳代（宮崎大）

3) 「獣医学分野ESP教材の開発」荒木瑞夫（宮崎大）

4) 「ESAPプレゼンテーションの指導」山内ひさ子（福岡女子大非常勤）

##### ④第189回東アジア英語教育研究会

日時：2018年9月15日（土）15:30～17:35

場所：西南学院大学

1) 「大学教養科目における英語による『平和科目』の提供」達川奎三（広島大）

2) 「大学入試英語長文問題におけるこの20年の縦断的調査—語彙・文法特性、テーマはどのように変化しているのか—」柏木哲也（北九州市立大）

##### ⑤第190回東アジア英語教育研究会

日時：2018年10月20日（土）15:30～17:30

場所：西南学院大学

研究発表

1) 「『ネイティブスピーカー主義』後の大学英語教育：プログラムの設計と運営を中心」小田眞幸（玉川大）

### 2. 支部総会・支部役員会等の開催

#### (1) 支部総会

日時：2018年10月13日（土）

会場：九州産業大学

議題：

1) 2017年度活動報告について

## 2) 2018年度活動計画について

### (2) 支部役員会

#### ① 2018年度第1回支部紀要編集委員会

日時：2018年6月2日（土）

場所：西南学院大学

議題：

1) 『JACET九州・沖縄支部紀要』第24号の編集に関する件

#### ② 2018年度第3回役員会

日時：2018年7月6日（金）

場所：九州産業大学

議題：

1) 2018年度支部研究大会の準備に関する件

#### ③ 2018年度第2回支部紀要編集委員会

日時：2018年7月14日（土）

場所：西南学院大学

議題：

1) 『JACET九州・沖縄支部紀要』第24号の編集に関する件

#### ④ 2018年度第3回支部紀要編集委員会

日時：2018年8月23日（土）

場所：メール会議

議題：

1) 『JACET九州・沖縄支部紀要』第24号の編集に関する件

#### ⑤ 2018年度第4回支部役員会

日時：2018年10月13日（土）

場所：九州産業大学

議題：

1) 2018年度特別研究会・支部総会・特別学術講演会に関する件

#### ⑥ 2018年度第4回支部紀要編集委員会

日時：2018年10月20日（土）

場所：西南学院大学

議題：

1) 『JACET九州・沖縄支部紀要』第24号の編集に関する件

#### ⑦ 2018年度第5回支部役員会

日時：2018年11月24日（土）（予定）

場所：西南学院大学

#### ⑧ 2018年度第6回支部役員会

日時：2019年2月16日（土）（予定）

場所：西南学院大学

## 3. その他

### (1) 支部紀要の発行

『JACET九州・沖縄支部紀要』第24号

発行日：2018年11月30日（予定）

（伊藤健一・北九州市立大学）

## 〈中国・四国支部〉

### 1. 支部大会の開催

#### (1) 春季研究大会

日時：2018年6月2日（土）13:00～17:30

場所：広島市立大学

研究発表

第1室

1) 「児童・生徒の英語でのパフォーマンス評価のためのルートマップ的ルーブリックの開発」中山晃（愛媛大）

2) 「大学英語教員の教師アイデンティティーに関する質的研究」森谷浩士（広島経済大）

3) 「『教室内英語評価尺度』を活用した英語教師教育—模擬授業における教師英語の省察—」池野修（愛媛大）・中田賀之（同志社大）・木村裕三（富山大）・長沼君主（東海大）

4) 「英語学習における動機づけと学習量に与える「井の中の蛙効果」の検討—所属クラスの習熟度と所属クラス内での位置づけのどちらの影響が大きいのか—」関谷弘毅（広島女学院大）

第2室

1) 「ロアルド・ダールの『Gallop Foxley』における言語表現とユーモアについて」田淵博文（就実大）

2) 「高専1年生に対する体育CLILの可能性（2）—英語を使用したバレーボールの授業を事例として—」二五義博（海上保安大学校）・伊藤耕作（宇部工業高等専門学校）

3) 「誤答分析に基づく音素配列確率の高い対照単語リストによる発話単語認知能力の向上について」小山尚史（岡山山）

4) 「The Changing Landscape for Elementary School English Education in Japan: Preparing Future Teachers for Future Challenges」Douglas Parkin（山口学芸大）

講演：「入試改革の動向と高校教育改革の現状～

英語教育を中心として一学び方と教え方英語教育を中心として一」講師：延原範昭（株式会社進研アド中国・四国支社長）

## (2) 秋季研究大会

日時：2018年10月27日（土）12:30～17:40

場所：松山大学

講演：「英語教育の将来を探る」講師：吉田研作（上智大）

研究発表

第1室

1) “Some Suggestions for an Integrated University Language Curriculum” Laurence Dante, David Townsend (就実大)

2) 「下位レベル学生の多読に向けての基礎語彙力習得について一語彙テスト結果の分析より一」三宅美鈴・山中英理子・遠藤利昌（広島国際大）

3) 「非言語コミュニケーションから読む『グレート・ギャツビー』」長瀬恵美（就実大）

4) 「ティーチング・ポートフォリオとアカデミック・ポートフォリオの違いについて」中山晃（愛媛大）

第2室

1) “Cognitive and Brain Science, Psychology, and Experiential Learning Type Lesson Plans for Elementary School” Glenn Magee（愛媛大）

2) 「中学校外国語科の『話すこと』における『やり取り』と『発表』に関する一考察一海外教科書に焦点を当てて一」房野桃花（安田女子大・院）

3) “Is There a Correlation Between English Proficiency, Motivation, and Output?” Douglas Parkin（山口学芸大）

4) 「下位レベル学生における多読のあり方に関する一考察一授業内外での多読の試みから一」三宅美鈴・山中英理子・遠藤利昌（広島国際大）

## 2. 支部役員会等の開催

### (1) 支部役員会

日時：2018年6月2日（土）11:00～12:30

場所：広島市立大学

報告事項：

1) 2017年度中国・四国支部事業報告書

2) 支部紀要15号について

3) 理事会報告（2018年3月18日開催）

議題：

1) 今年度（平成30（2018）年度）の活動について

2) 2018年度中国・四国支部人事について

3) 来年度（平成31（2019）年度）の事業計画について

4) その他

### (2) 支部役員会

日時：2018年10月27日（土）11:15～12:20

場所：松山大学

報告事項：

1) 議事録確認

2) 報告

議題：

1) 2018年度の活動について

2) 2019年度中国・四国支部人事について

3) 2019年度の事業計画案と予算案について

4) その他

## 3. その他

### (1) 支部ニューズレターの発行

『JACET中国・四国支部Newsletter』21号

発行日：2018年7月30日

『JACET中国・四国支部Newsletter』22号

発行日：2019年1月10日（予定）

### (2) 支部イベントの開催

Oral Presentation & Performance (OPP)

開催日：2018年12月16日（日）（予定）

場所：広島工業大学

（松岡博信・安田女子大学）

## 〈関西支部〉

### 1. 支部大会、支部講演会等の開催

#### (1) 支部大会

日時：2018年11月17日（土）10:00～18:15

場所：関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス

基調講演

「Fairness and Justice in Language Assessment」

ティム・マクナマラ（メルボルン大）

特別講演

1) 「Written Corrective Feedback: Issues in Past and Current Theory and Research」新谷奈津子（神戸学院大）

2)「機械翻訳と英語教育」トム・ガリー (東京大) 企画シンポジウム

「映画を使う、映画を作る：学生の理解を深めモチベーションを高めるための英語授業の新展開」仁科恭徳 (神戸学院大)・吉村征洋 (摂南大)・藤原康弘 (名城大)・廣森友人 (明治大)・鎌倉義人 (愛知大)・桐村亮 (立命館大)・吉川祐介 (近畿大) 研究発表

1)「上海の中学校の英語授業における教員の言語使用一二年に渡る分析の結果から一」大賀まゆみ (立命館大)

2)「母語援用アプローチが日本人EFL学習者の発音習得にもたらす効果：/ɹ/ と /l/ を中心に」上野舞斗 (関西大・院)・王蕊 (関西大・院)・山崎千英子 (関西大・院)・山根繁 (関西大)

3)「英語母語話者児童向け絵本を用いた多読多聴活動が理系学生のスピーキング力に与える影響に関する一考察」松田早恵 (摂南大)・井村誠 (大阪工業大)・中西のりこ (神戸学院大)・マイケル・ハーキ (摂南大)

4)「日本人大学生の英文エッセイに見られる多義語の誤用分析一空間前置詞の意味ネットワークに注目して一」中西淳 (神戸大学・院)

5)「英文復唱テストによる文法難易度の検証：処理可能性理論および筆記テストによる難易度と比較して」西谷敦子 (京都産業大)

実践報告

1)「ホスピタリティ産業で求められるESPコミュニケーション」仁科恭徳 (神戸学院大)・野口ジュディー (神戸学院大)・倉増泰弘 (徳山工業高等専門学校)

2)「実践的な英語授業における京都ガイドツアーの企画及び実施：その効果と問題点」ライト・キャロリン (京都光華女子大)

3)「バーチャルリアリティ (VR) を用いた英語教育への支援について」矢野浩二郎 (大阪工業大)・村上裕美 (関西外国語大)

4)「英語科教育における自律的・協同的・省察的な学び一講義からAL型講義への転換一」井上聡 (環太平洋大)

5)「災害医療のための英語視聴覚教材の開発」秋山庵然 (日本体育大)

6)「内容中心教授法に基づく小学英語ライティング教材開発」富田房敬 (名古屋学院大・院)

7)「文学作品の原作を題材に、EFLでの論理的構

成ライティングに挑む：Sherlock Holmesシリーズの A Study in Scarlet 等を用いて」齋藤安以子 (摂南大)

8)「ビデオ視聴による自己フィードバックをプレゼンテーション能力向上につなげる試み」三木訓子 (立命館大)

9)「OSAKA ENGLISH VILLAGEによるモチベーションアップの試み」川越栄子 (神戸女学院大) コロキアム

「ESP/EAP分野の国際的な研究動向と質的研究手法の使用：アカデミックリタラシーとジャンルアプローチの事例研究」上條武 (立命館大)・長尾明子 (龍谷大)・西条正樹 (近畿大)

ポスター発表

「再生課題から見る日本人 EFL 学習者のコロケーション学習における L1 の役割」デイヴィス恵美 (関西学院大・院)

## (2) 支部講演会

### ①第1回支部講演会

日時：2018年8月19日(日) 15:30～17:00

場所：神戸国際会館

題目：「高等学校指導要領に謳われた『英語の授業は英語で (TEE policy)』の結果と影響、そして疑問と課題」岩井千秋 (広島市立大)

### ②第2回支部講演会

日時：2018年10月13日(土) 15:30～17:00

場所：同志社大学今出川キャンパス

テーマ：「国際的にみた日本の外国語教育への提言一EUの教育政策から考える一」

1)「スペインの外国語教育制度からの示唆」植松茂男 (同志社大)

2)「イタリアの外国語教育制度からの示唆」二五義博 (海上保安大)

3)「オランダの外国語教育制度からの示唆」高坂京子 (立命館大)

4)「ドイツの外国語教育制度からの示唆」杉谷眞佐子 (関西大・名誉教授)

5)「'Happy Slave Syndrome' からの覚醒」大谷泰照 (大阪大・名誉教授)

## 2. 支部総会・支部役員会等の開催

### (1) 支部総会

日時：2018年11月17日(土)

場所：関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス

## (2) 支部役員会

### ①第1回支部役員会

日時：2018年8月19日（日）13:30～15:00

場所：神戸国際会館

審議事項：2019-2020年度 関西支部支部長選出

報告事項：

- 1) 支部長報告
- 2) 2018年度事業計画について
- 3) 2017年度予算実績および2018年度予算について
- 4) 2018年度人事について

5) 研究企画委員会報告

6) 紀要編集委員長報告

7) その他

### ②第2回支部役員会

日時：2018年10月13日（土）13:00～15:00

場所：同志社大学今出川キャンパス

審議事項：

- 1) 2019年度事業計画（案）について
- 2) 2019年度予算（案）について
- 3) 2019年度人事（案）について
- 4) 2020年国際大会会場校について
- 5) 関西支部支部長選出規定の改定について
- 6) その他

報告事項：

- 1) 支部長報告
- 2) 研究企画委員会報告
- 3) 紀要編集委員長報告
- 4) その他

## 3. その他

支部ニューズレターの発行

- 1) JACET Kansai Newsletter No. 81

発行日：2018年7月31日

- 2) JACET Kansai Newsletter No. 82

発行日：2018年11月1日

（住吉誠・摂南大学）

## 〈中部支部〉

### 1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

- (1) 支部大会

日時：2018年6月16日（土）10:00～17:15

場所：愛知大学 名古屋校舎

大会テーマ：大学英語入試で何を測るべきか

What Should University Entrance Exams Measure?

特別講演：

「大学入試と英語民間試験について：課題が生み出すもの」鳥飼玖美子（立教大）

シンポジウム

テーマ：「大学英語入試で何を測るべきか」

司会：藤原康弘（名城大）

第一部 講演

「大学入試改革に伴う英検協会の取り組み」塩崎修健（公益財団法人日本英語検定協会）

「大学英語入試改革の論点：4技能測定の意義と課題」法月健（静岡産業大）

第二部合同ディスカッション（鳥飼玖美子・塩崎修健・法月健）

研究発表

1) 「思考力と英語ライティング力を育成するサマリーライティング活動：英語専攻学科と放送大学での事例に基づき」佐藤雄大（名古屋外国語大）

2) 「学生たちが期待する英語の授業—新入生に対する調査結果から—」高橋妙子（名古屋市立大（非））、石田知美（名古屋大）、内田政一（桜花学園大）、鹿野緑（南山大）、宮田学（名古屋市立大）

3) 「地域発信英語プロジェクト—学習者におけるタスクの有効感に関する考察—」後藤隆昭（静岡県立大）

4) “Practical insights and approaches to pronunciation instruction” Leah Gilner (Aichi University)

5) 「自律的学修を促すリーディング学習活動の検討」今井倫子（愛知大）

6) 「地域と連携する英文多読活動—学生の動機づけの観点から—」後藤隆昭（静岡県立大）

### (2) 秋季定例研究会（予定）

日時：2018年11月17日（土）

場所：名古屋外国語大学

講演：「アカデミック・ライティングとその支援—早稲田大学での取り組み—」佐渡島紗織（早稲田大）

研究発表

- 1) 「プロソディ指導と英文読解力の発達の関係に



ついて」吉川りさ（豊橋技術科学大）  
2) 「外国語読解不安研究の成果と展望」三上仁志（中部大）  
研究会発表  
「カリキュラムの中の英語アカデミック・ライティング指導」佐藤雄大（名古屋外国語大）

## 2. 支部総会・支部役員会等の開催

### (1) 支部総会

#### ① 第1回

日時：2018年6月16日（土）

場所：愛知大学 名古屋校舎

議題：

- 1) 2017年度本部報告
- 2) 2017年度中部支部事業報告
- 3) 2017年度中部支部会計収支報告
- 4) 2018年度人事について
- 5) 2018年度中部支部事業計画について
- 6) 2018年度中部支部予算について

#### ② 第2回（予定）

日時：2018年11月17日（土）

場所：名古屋外国語大学

### (2) 支部役員会

#### ① 2018年度第3回役員会

日時：2018年6月16日（土）

場所：愛知大学 名古屋校舎

議題：

- 1) 本部報告
- 2) 事務局報告
- 3) 会計報告
- 4) 第34回（2018年度）中部支部大会

#### ② 2018年度第4回役員会

日時：2018年7月14日（土）

場所：名城大学 名古屋ドーム前キャンパス

議題：

- 1) 本部報告
- 2) 事務局報告
- 3) 会計報告
- 4) 秋季定例研究会

#### ③ 2018年度第5回役員会

日時：2018年10月6日（土）

場所：名城大学 名古屋ドーム前キャンパス

議題：

- 1) 本部報告

2) 事務局報告

3) 会計報告

4) 支部長選挙

5) 秋期定例研究会

#### ④ 2018年度第6回役員会（予定）

日時：2018年11月17日（土）

場所：名古屋外国語大学

#### ⑤ 2018年度第7回役員会（予定）

日時：2018年12月8日（土）

場所：名城大学 名古屋ドーム前キャンパス

#### ⑥ 2018年度第8回役員会（予定）

日時：2019年1月12日（土）

場所：名城大学 名古屋ドーム前キャンパス

## 3. その他

### (1) 支部紀要の発行

『中部支部紀要』16号

発行日：2018年12月20日（予定）

### (2) 支部ニュースレターの発行

JACET-Chubu Newsletter No. 41

発行日：2018年12月20日（予定）

（佐藤雄大・名古屋外国語大学）

## 〈関東支部〉

### 1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

#### (1) 支部大会

日時：2018年7月8日（日）9:00～18:00

場所：神田外語大学幕張キャンパス

大会テーマ：英語教育におけるアクティブラーニングの課題と可能性

Challenges and Possibilities of Active Learning in English Language Education

基調講演：

「英語教育におけるアクティブラーニングの課題と可能性」白水始（東京大）

研究発表 10 件、実践報告 11 件、賛助会員発表 2 件、ワークショップ 1 件、開催校企画 1 件、関東支部企画 5 件

#### (2) 月例研究会

##### ① 第2回月例研究会

日時：2018年6月9日（土）16:00～17:20

場所：青山学院大学青山キャンパス  
題目：「英語4技能試験に求められる語彙知識と語彙学習法」萱忠義（学習院女子大）  
②第3回月例研究会  
日時：2018年10月13日（土）16:00～17:20  
場所：聖心女子大学  
題目：「今後の悉皆英語教育」トム・ガリー（東京大）

### (3) 講演会（青山学院大学英語教育研究センター・JACET 関東支部共催）

- ①2018年度第2回講演会  
日時：2018年9月8日（土）16:00～17:30  
場所：青山学院大学青山キャンパス  
題目：「英語アカデミックライティングとプレゼンテーションのデータ収集・分析法—研究と教育に役立てるために—」奥切恵（聖心女子大）
- ②2018年度第3回講演会（予定）  
日時：2018年11月10日（土）16:00～17:30  
場所：青山学院女子短期大学  
題目：「高校生の英語はどのように伸びるのか」片桐一彦（専修大）
- ③2018年度第4回講演会（予定）  
日時：2018年12月8日（土）16:00～17:30  
場所：青山学院大学青山キャンパス  
題目：「日本の大学における通訳・翻訳指導—理論と実践のギャップをどう埋めるか—」田中深雪（青山学院大）
- ④2018年度第5回講演会（予定）  
日時：2019年1月12日（土）16:00～17:30  
場所：青山学院大学青山キャンパス  
題目：未定  
※月例研究会・講演会の詳細は、支部会員MLにて配信及び関東支部HP上に掲載されます。

## 2. 支部総会・支部役員会等の開催

- (1) 支部総会  
第1回支部総会  
日時：2018年7月8日（日）  
場所：神田外語大学幕張キャンパス  
議題：2017年度事業報告・会計報告、2018年度事業計画  
第2回支部総会（予定）  
日時：2018年11月12日（土）15:20～15:50  
場所：青山学院女子短期大学

議題：2019年度支部事業計画・予算、人事案

### (2) 支部役員会

- ①第3回支部運営会議  
日時：2018年6月9日（土）14:30～15:15  
場所：青山学院大学青山キャンパス  
議題：  
新規研究企画委員について  
支部大会アンケートについて  
講演料の金額について
- ②第4回支部運営会議  
日時：2018年9月8日（土）14:30～15:15  
場所：青山学院大学青山キャンパス  
議題：  
2018年度支部大会会場校と大会テーマの選定について
- ③第5回支部運営会議  
日時：2018年10月13日（土）14:30～15:15  
場所：聖心女子大学  
議題：  
次回大会開催校とテーマについて  
事前振り込みの値引きについて  
関東支部規約の改定について  
JACET 関東HPについて  
支部委員会の委員の異動について  
月例研究会のあり方及びJACET 関東支部の活性化について
- ④2018年度支部運営会議  
第6回11月10日（土）14:10～15:10（場所：青山学院女子短期大学）（予定）  
第7回12月8日（土）14:30～15:30（場所：青山学院大学）（予定）  
第8回1月10日（土）14:30～15:30（場所：青山学院大学）（予定）

## 3. その他

- (1) 支部ニューズレターの発行  
『JACET 関東支部ニューズレター』第11号  
発行日：2018年9月30日

（高木亜希子・青山学院大学）

## 〈東北支部〉

### 1. 支部大会、支部講演会、研究会等の開催

#### (1) 支部例会（予定）

日時：2018年11月25日（日）14:20～15:30

場所：TKP 仙台西口ビジネスセンター

研究発表：

- 1) 「小学校英語の音声教育について（仮題）」西原哲雄（宮城教育大）
- 2) 「英語教育改革をめぐる」會澤まりえ（尚絅学院大）

### 2. 支部総会・役員会等の開催

#### (1) 支部総会（予定）

日時：2018年11月25日（日）13:30～14:00

場所：TKP 仙台西口ビジネスセンター

議題：

- 1) 2017年度事業・活動報告・支部会計報告
- 2) 2018年度事業・活動計画、人事案等

#### (2) 支部役員会

##### ①第2回国際大会組織委員会

日時：2018年6月30日（土）13:30～17:00

場所：東北学院大学土樋キャンパス

議題：

- 1) 2018年度国際大会の開催について

##### ②第2回役員会（予定）

日時：2018年11月25日（日）12:00～13:30

場所：TKP 仙台西口ビジネスセンター

議題：

- 1) 2019年度活動計画・人事案（支部の運営、事業・活動計画等）について
- 2) 2018年度国際大会の事後総括について
- 3) 支部ニューズレターの発行と編集について

（岡崎久美子・仙台高等専門学校）

## 〈北海道支部〉

### 1. 支部大会、支部講演会、支部研究会等の開催

#### (1) 支部大会

日時：2018年7月7日（土）13:00～17:25

場所：北海道大学

基調講演：

『「話す力・書く力」を育てる英語指導法—意味の順序に着目して—』田地野彰（名古屋外国語大）  
シンポジウム：

テーマ：明日の授業にむけて—「意味順」で変わるこれからの英文法指導—

- 1) 『「意味順」を活用した英語表現活動』山田 浩（高千穂大）
- 2) 「文法解析タスクを活用した聴解指導の実践」細越響子（京都府立大）
- 3) 「タスクを活用した英語授業における『意味順』の役割」加藤由崇（中部大）

研究発表：

- 1) “Towards the Alleviation of Language Anxiety: A Mixed Method Study” Satomi Fujii（北海道大）
- 2) “An Investigation into L2 Learners’ Self-Efficacy in Digital Literacy” Ivy Chuhui Lin（北海学園大 [非]）

#### (2) 支部研究会

##### ① 第1回支部研究会（予定）

日時：2018年11月18日（日）

場所：天使大学

### 2. 支部総会・支部役員会等の開催

#### (1) 支部総会

日時：2018年7月7日（土）12:30～12:50

場所：北海道大学

議題：

- 1) 支部長報告
- 2) 2017年度事業報告
- 3) 2018年度事業計画
- 4) 2018年度人事
- 5) 各種委員会報告
- 6) 2019年度事業計画案
- 7) 2019年度人事案

#### (2) 支部役員会

① 第1回支部役員会

日時：2018年7月7日（日）10:00～12:00

場所：北海道大学

② 第2回支部役員会（予定）

日時：2018年11月18日（日）10:30～12:00

場所：天使大学

（目時光紀・天使大学）

編集後記

JAAL in JACET の始まりを『JACET 通信』のバックナンバーで確認してみました。すると、1982年9月発行の第43号に「第1回応用言語学研究会開催さる」と題する記事がありました。矢野安剛氏による詳細な報告です。JACETのAILA加入の準備として、1982年4月に学会内に「応用言語学研究会」が立ち上がり、同年6月に第1回研究会が開催されたわけです。

この報告には「第1回研究会の講演の要旨は『JACET 通信特別号』として9月中旬に発行予定」とありました。そこで本部事務局に確認したところ、この特別号は保管していないとの回答。特別号をお持ちの会員がおられましたら、ぜひ事務局にご一報ください。JAAL in JACET 及び『JACET 通信』の活動の歴史を確認・継承するのに役立つと思います。（水島）

編集：『JACET 通信』委員会

理事 佐藤雄大・名古屋外国語大学

高橋俊章・山口大学

委員長 水島孝司・南九州短期大学

副委員長 田口悦男・大東文化大学

遠藤雪枝・昭和大学

Gilner, Leah・愛知大学

伊藤健一・北九州市立大学

松岡博信・安田女子大学

目時光紀・天使大学

岡崎久美子・仙台高等専門学校

住吉 誠・摂南大学

2018年12月1日発行

発行者 一般社団法人 大学英語教育学会（JACET）

代表者 寺内 一

発行所 〒162-0831 東京都新宿区横寺町55

電話（03）3268-9686

FAX（03）3268-9695

<http://www.jacet.org/>

印刷所 〒252-0021 座間市緑ヶ丘3-46-12

有限会社 タナカ企画

電話（046）251-5775